
自殺屋

桶十芭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺屋

【Nコード】

N4156A

【作者名】

桶十芭

【あらすじ】

自殺屋。それは不思議な不思議な店の名前。どこにあるのかもどうしたら見つかるのかもわからない店。そこには自殺を考える人が訪問する。一度立ち寄ると何かが変わるかも知れない。

Case 1-1 少年

自殺をしよう。

一人の少年が細い裏路地を彷徨していた。

彼の目的は、自殺場所探し。

ふらふらと歩き続けてすでに4時間。

別に家でもいいと思ったが、それでは親に迷惑がかかる。

出来るだけ誰にも見つからないように自殺をしようと、少年は人はいない場所を求めて当てもなく彷徨い続けた。

そんな彼の目に飛び込んだ、一枚の看板。

＋自殺屋＋

見たこともないその看板に、自然と目を惹きつけられる。

「…なんだろうこの店…。自殺を手伝ってくれるのかな？」

少年は、少し戸惑い、店の中へと足を踏み入れた。

外観では、とても小さく古びた店だが、中に入ると異常に広く、暗くなった店の奥はまったく見えない。

不思議な雰囲気になった店内だが、ひとつはつきりわかることがある。

それは、大量の本が棚に並んでいること。

本屋なのか、図書館なのかはわからないが、この本をどうにかする店なのは確かであろう。

少年は一度店内をぐるりと見渡すと、ゆっくりと本棚に近づいた。

そして並んでいる本達を見て、眉間に皺を寄せる。

本の題名はどれも、自殺に関するもの。当然中身もだろう。

一番左上の本を棚から取り出し、最初のページを開く。

『自殺とは』

そう題されたその本の内容は、題名にしつかりと沿っている。延々と自殺について書き綴られたその本は、約300ページほど。その全てが小さな文字で埋め尽されている。

綺麗に整理された文字の羅列を、ただ黙々と読み進める。

その本には作者も出版社も書いていない。

真っ黒な表紙に白抜きの文字で題名が書いてあるだけである。

いかにも怪しいその本を飽きることなく最後まで読みきった。

なんだか妙に晴れた気分になった少年が本を棚に戻すと、背後から足音が聞こえた。

すぐに振り返るがそこには誰もおらず、かなり離れたカウンターに人間が座っている。

確かにすぐ後ろで歩く足音がした。

しかしその人間は座って、いるのだ。

一気に少年を寒気が襲った。

あれは本当に人間なのかと恐怖を感じる。

「そんなところに立ち尽くしていないで、こちらへどうぞ。」

声を発したその生き物が男だと、理解した。しかしさらに人間だと思えなくなった。

あんなにも離れたところにいるのに、声が耳元から聞こえるのだ。

低く、腹の底に響くいつまでも耳の奥に残る声音。

「さあ。」

促されて、暫く固まったままだった少年は、一度ぐくりと唾を飲み込みカウンターへと向かった。

冷や汗すら出ない。

カウンターに着くと、男はぺこりと軽くお辞儀をした。

「ようこそいらっしゃいました。」

「あ：あの、ここって何の店なんですか？」

「ここは『自殺屋』ですよ。外に看板があったでしょう。まさかわからずに入って来たのですか？」

「いえ、そうじゃなくて：：どんな店なのかなって：：」

少年が弱々しい声で尋ねると、男は立ち上がり、少年に背を向けて話し始めた。

「そのままですよ。ここは、自殺について知って頂く為の店です。先程本を一冊お読みになったでしょう。」

くると突然身を翻し、男は少年に言った。

「いまいちどんな店なのかはつきり理解できない。」

自殺について知る為の店とはどういうことなのか。そのままの意味なのだろうが、何せ少年はそんな店を聞いたことも見たこともない。想像は微塵も湧かなかった。

「あの、じゃあここは自殺の本を売る本屋なんですか？それとも図書館？」

その問いに男は小さく首を横に数回振った。

「どちらとも言えませんね。本をお売りするわけではありません。」

貸し出すのです。しかし、図書館とは異なります。一人にしか、貸し出せんから。」

「一人？」

「ええ。」

そこまで話して、少年も男も黙った。

沈黙が、二人の間の空気のにしかかる。

男はうつ向いた少年の顔を覗き込んで声をかけた。

その質問に、少年の息が詰まる。

「自殺を、したいのですか？」

その一言を聞いただけで、少年はこの男に今までの人生を見透かされたような気分になった。

生唾を飲み込み、ゆっくりと一度頷く。

すると、男はにこりと笑ってカウンターの上に一枚のカードを取り出した。

「それではあなたにこの店を貸し出しましょう。さあ、手を出して

ください。」

店を貸す、という男の言葉に戸惑いながら、少年は手を出し、言われるままにカードの上に置いた。

ひやりと冷たい感覚が、掌を伝う。

「ここにあなたの名前を。思い浮かべるだけで結構です。」

そう言われて少年が自分の名前を思い浮かべると、カードに独りでに名前が浮かび上がった。

黒いカードに赤色の名前。

なんとも不気味な配色である。

「これでこの店はあなたのものです。」

「僕の…もの？あの、お金とか要らないんですか？」

「いえいえ必要ありませんよ。ただ、少し決まり事、というか注意がありますので覚えて帰ってください。」

言って、男は再びカウンターに腰を下ろした。

真っ直ぐ少年を見つめ、口を開く。

「まず、このカードは紛失しないでください。割ったりしてもいけません。紛失した時あなたの身の保証はいたしません。それから、この店のことは誰にも話さないでください。本は一度に何冊借りても結構です。ただし、必ず左上から借りてください。一冊も飛ばしてはいけません。貸し出し期限はございません。いつか必ず返しに来ていただければそれで。本を読むときは、一文字一文字丁寧に読んでください。一文字も飛ばしてはいけませんよ。そのあとどうなっても当店は責任を一切負いませんので。このくらいです。何かご質問は。」

「ええと…その、一文字一文字飛ばさずに読むっていうのは…。例えば僕が2、3文字飛ばしても、それを確認するなんてできるんですか？」

「できますよ。」

「どうやって？」

「方法は問題ではありません。あなたが信じるかどうか、ですよ。」

にやりと笑われ、少年は押し黙った。
信じるしかない、そう気付く。

「最後の確認です。この店を借りますか？」

「あ、あの、もし途中でこの店を返したくなったらカードを返せばいいんですか？」

「いえ、その必要はありません。あなたがこの店を必要としなくなるときは、自殺をなさるときですから。」

背筋を冷たいものが這った。

硬直してしまった少年を見て、男はにこりと笑った。

「そんなに脅えることはありませんよ。大丈夫です。さ、どうなさいますか？」

男が差し出したカードを、少年は戸惑いつつ受け取った。

「ありがとうございます。それでは本を持ってお帰りください。先程説明した注意をくれぐれもお守りいただきますよう。」

Case 1-2 十本

「ただいま…」

少年は三冊の本とカードを持って帰宅した。

本当は帰ってくるつもりはなかった家。母親がいつも通り迎えてくれた。

「遅かったわね。御飯は？」

「いない。」

「気分でも悪いの？ 顔色がよくないわ。」

「平気だよ。疲れたから寝る。」

「そう？ ちゃんと暖かくして寝るのよ。」

「うん」

自分を気遣う母親の言葉に空返事をして、少年は自室へと入った。

鍵を閉め、鞆から本を取り出し左上にあった本から順に読み始める。元々少年は本を読む方ではなかった。

しかし、この本は飽きることがない。まるで本に意識を吸い込まれたかのように熱中した。

母親の声すら聞こえなくなるほど集中し、三冊を読みきったのは深夜の一時であった。

読みきってなんともいえない酷い虚無感に襲われた少年は、本を持って家から抜け出した。

向かう先はもちろん十自殺屋十。

しかし時間が時間なのだ。

普通の店が開いているはずはない。

+++++

店は当然のように開いていた。

扉が開いていて、中で昼間の男がぼんやりとカウンターに座ってい

る。

少年が店の敷居を跨ぐと、宙を泳いでいた男の視線が水平に下ろされそちらへ向いた。

「おや、いらっしゃいませ。どうなさいました？こんな時間に。」

「あ：あの、読みきっちゃって：」

遠慮がちに言うと、男はくすくすと笑って言った。

「それは素晴らしい。ですがそんなに急がなくても、あなたが借りている間はどこにも行きませんよ。」

そして本棚に近付き新しく左上から五冊の本を取り出し、それを少年の持っている三冊と交換した。

「どうぞ。」

男が上着を羽織り直した風で、カウンターの上の蝋燭が揺れる。

「本を読むのが好きですか？」

男に聞かれて、少年は首を横に振った。

「普段は読みません。でも、なんだかこの店の本は不思議なくらい飽きずに最後まで読めるんです。」

「そうですか。あなたがこの店の本を全て読み終わるのを楽しみにしています。」

男はくるりと身を翻し、本棚に三冊の本を戻してまた少年の元へと戻った。

「さあ、もうお帰りなさい。私は眠ります。」

男が蝋燭を吹き消すのと同時に、少年の意識はそこで途切れた。

Case 1－3 理由

朝目が覚めると、枕元には五冊の本がしっかりと置いてあった。昨夜のことが夢ではなかったのだと確信する。

憂鬱な朝が来た。

憂鬱なのは少年にとって、だが。

のろのろとベッドから体を引き摺り出し、着替えを済ませる。

母親が呼ぶ声にだるそうに返事をし、食事も摂らずに玄関を出た。

「お前来るのおせえよ！早く来て俺の代わりに週番の仕事しろって言っただろ！」

教室に入るなり今日一番の罵声が少年に浴びせられた。

無視をして自分の机に向かう。

「ちょっと私の近く通らないでよ！」

「こっち見ないで気持ち悪い！」

どれもこれもなぜそんなことを言われなければならないのか理解に苦しむことばかりである。

全ての声を意識の外に追い出し、少年は席に着いた。

すぐにクラスメイトが寄ってきて少年の机を前方から蹴り飛ばす。

机は、少年ごと勢い良く倒れた。

机の中身が教室に飛び散り、それを近くにいたクラスメイト達が一斉に避けた。

「お前何してるんだよ！早く片付けろよ！！」

少年がやったことではないのにも関わらず、罵声と文句は全て彼に向けられた。

どうしてこんな扱いを受けなければならないのか少年にはわからない。
い。

少年に何か問題がある訳ではないのだ。クラスメイト達がこんなことをする理由がわからない。

否、理由などないのかもしれない。

彼らはストレスの吐き捨て場が欲しいだけなのだから。

たまたまその場が少年だっただけの話なのだ。

泣き出しそうになるのを、少年は唇を噛んでぐっと堪えた。

――――

「いらっしゃいませ。」

「こんにちは。また、貸してください。」

「どうぞ。」

男が用意していた五冊の本を受け取ると、少年はそのままそこに立ち尽くした。

俯いた少年を椅子に座らせ、男はそつと話しかける。

「…辛そうですね。」

「え？」

「私に話してはくさいませんか。何があったのか。何があなたをそこまで追い詰め苦しめているのか。」

優しく聞いてくれるのに対して、少年は数回首を横に振った。

「いいえ。聞いてもらうのも…情けないですから。」

「そんなことは無いと思いますがね。」

少年が無理して笑うのを見て、男はため息をついた。

次いで、少し微笑む。

「どうしても耐え切れなくなったら話してください。ここはそういう店でもあるのですから。」

男の言葉に頷くことはせずに、少年は店を後にした。

C a s e 1－4＋返（前書き）

かなり前回から間が空いてしまいました汗
またここから頑張ります。

Case 1-4 返

少年が自殺屋に出会って半年。
遂にいじめは暴力へと姿を変えた。

「お前うざいんだよ！」

人気の無いところに呼び出され、突然胃に強い衝撃を受けた。
圧迫された胃は中身を全て外に押し出した。

嗚咽を洩らしながらうずくまる少年を更に追い詰めるようにクラス
メイト達は暴力を続ける。

指一本すら動かせない程弱った少年に、残酷な言葉が投げつけられた。

「お前なんか死んじゃえ！」

そして、煙草の火が容赦なく少年の手に襲いかかる。

少年は泣き叫ぶことなく歯を強く食い縛った。

こんなに辛い思いをしてまで

なぜこんなにも生きようとしているのだろうか

本へと向かっていた少年の意識は

一気に元の考えへと引き戻された。

もう死んでしまおう

自分が死んで悲しむ人など

たかが知れている。

こんな苦しみに耐えて生きるのは

馬鹿馬鹿しいことだ。

少年は荷物も持たずに学校を飛び出した。

まだ全身が痛む。

それでも少年は探した。

自分の死に場所を。

「…あ」

歩いている途中で、ポケットの中の冷たい感触に気付いた。

「…返しにいこう」

自殺をするときには返す必要がないとは言われたが、なぜか少年は返しに行かなければならないような気がした。

それに、彼になれば死ぬことを告げてもいいように思った。一度は引き留めてくれた彼にだけは。

Case 1－5＋大凶

一枚のカードがパチンと音を立ててカウンターに置かれた。

「どうなさいましたか？」

男が尋ねる声に、少年は俯いたまま答えた。

「この店、返します。」

その一言だけ言った少年に、男はもうひとつ尋ねた。

「…自殺をするのですか？」

男の問いに、少年は頷くことだけをした。

それ以上は口を開かない。

男は黙って少年の震える手に触れた。

冷えきった手の甲で、火傷の痕が痛々しい。

「話しては頂けませんか。あなたを追い詰めているものが、一体何なのか。」

「話して何になるんですか。もう、いいんです。」

ぎゅっと閉じた少年の目から、涙が溢れた。

男は一度ため息をつき、次いで少し笑った。

少年を向かいの椅子に座らせ、カウンターのの中から三枚のカードを取り出した。

それを何度か混ぜ、カウンターの上に伏せる。

そして、少年を促した。

「一枚選んで裏返してください。」

「なんですか。」

「いいですから。」

少年は渋々右端のカードに手を伸ばした。

その場で表向きにする。

そこには、赤い文字で大きく『大凶』と書いてあった。

「…なんなんですか。」

少年は強く男を睨んだ。男はふふと笑う。

「これは今の貴方を表しています。」

その言葉に、少年はさらに睨む目に力をいれた。

椅子から勢いよく立ち上がり、男に怒りをぶつける。

「今の僕の状況が大凶だって言うんですか！」

「おや、違いますか。」

「……だったら何だって言うんですか！ いい加減にしてください！」
凄惨な形相で自分を罵倒する少年を、男は静かになだめた。

「落ち着いてください。『大凶』ということは、もうこれ以上落ちることはないのです。もう地面に足がついているのですから。そう考えると、あとは上がるしかないのですよ。そうは思いませんか。」

「……上がらないかもしれないじゃないですか。」
「ええ、ですが上がるかもしれません。それが生きるということですよ。」

そういつて、男は全てのカードを表にした。どのカードにも、『大凶』の文字。

少年が眉間に皺を寄せると、男は笑った。

「すみません。実はこれ、全て『大凶』なのです。」

「馬鹿にしてるんですか！」

少年が怒るのを半ば無視して、男は少年が選んだものだけを残し、残りの二枚を破り捨てた。

そして、最後の『大凶』を裏返しに戻す。次いで少年の手を引き、カードの上に乗せた。

「貴方が変えようと、変わろうと思えばこの状況はいくらでも変わります。」

男が言い終わってから手の下のカードを裏返すと、ついさっきまで『大凶』だったカードは『大吉』へと姿を変えていた。

少年が目を見開く。

「不思議でしょう？ 生きるとはこういうことですよ。一瞬あとには何が起こるかかわからない。だからこそ面白いのです。今のまま終わっているのですか。貴方の未来が、いえ、一時間後がどんなものか

も知らずに命を絶ってしまうのですか。」

男が静かに話し続けるのに、少年は俯いたまま答えない。

「あの本棚、どこまで続いているか気になりませんか。最後の本がどんなものなのか知らずに終わらせてしまうのですか。最後の本、手にしてみたいと思いませんか。」

全てを言い終わって黙ると、少年はぱっと顔を上げた。

その目に、もう涙は無い。

「やっぱりもう少しこの店貸してください。最後まで、見てみたいです。」

瞳の中にもう迷いは無かった。

男はにこりと笑った。そして、カウンターの下から新しく五冊の本を取り出す。

「早くお帰りなさい。夜が来ます。ちゃんと手、治療してくださいね。」

Case 1-6 別

「こんにちは。」

「いらっしやいませ。」

すでに青年となった少年が店を訪れた。

店の男と親しそうに挨拶を交わし、本を返す。

「また、貸してください。」

「ええ、どうぞ。おや、もうすぐ貴方が借りた本が三千冊になりますね。」

男の言葉を聞いて青年は驚いた。そんなに本を読んだ気はしないのだ。

しかし実際月日は三年経っていた。

「さあ、こちらへどうぞ。」

男が青年を店の奥へと促す。青年は黙って男の後ろをついていった。しばらく歩くと、ずっと長く続いていた本棚の終わりが見えてきた。男が振り返り、青年に笑いかける。

「実は、次の本が最後の本なのです。」

そう言って、一冊の本を取り出した。

三年間読み続けてきた中には一冊も無かった、白い表紙の本。

その表紙にはなんの文字も書かれていない。そして今までの本とは比べ物にならないほど薄い。これが最後の本だといわれると、なんだか拍子抜けな気がしなくもない。

「さあ、最後に聞きましょう。もう、自殺をしようという気持ちはございませんか。」

男の問いに、青年は力強くうなずいた。その瞳に、もう絶望は無い。「そうですか。それはよかった。生きるって楽しいでしょう。どうか生きてください。貴方の人生にはまだまだ喜びが満ちているはずです。」

男は本を差し出す。

「カードを出してください。」

言われて、青年はポケットからカードを取り出した。

「そのカードとこの本を交換すれば、この店は貴方から返却されたことになります。長い間、ご利用誠にありがとうございました。」
言いながら、深々と頭を下げる。

「あの、また…会えますか。」

青年が尋ねたのに、男は首を横に振った。

「いいえ、貴方にはもうこの店は必要ありませんから。ですが…そうですね、貴方がまた『大凶』を引いてしまった時にもう一度お会いしましょうか。」

青年は一度カードを出すのを躊躇してから、顔を上げくりと頷いた。

差し出したカードを男が受け取り、代わりに本を渡す。

そして、また笑った。

その顔は、青年が生きてきた中で最も優しい笑顔だった。

「それでは、お元気で。ありがとうございました。」

もう一度男が頭を下げたと同時に、青年の意識は途切れた。

「あなた、あなた起きて。こんなところでうたた寝しないでよ。」

「ん…あれ？ここは何処…？僕は今…何歳？」

「何を言っているの？あなたは今26歳でしょう。それに僕だなんて…寝ぼけているの？」

「ああ…ごめん、なんでもないよ。…夢だ。」

「パパ！遊ぼう！」

「よし、おいで。」

どうでしょう。

自殺屋がどんな店なのかわかっていただけたでしょうか。
こんな店が存在するのです。

どこにあるか、ですか？

さあ、どこでしょうね。

最後の本の中身？

さあ、何が書いてあるのでしょうかね。

教えてほしいですか？

それはあなたが自殺屋に出会えた時に自分の目で確認してください。
自殺屋はいつでもあなたのことをお待ちしております。

いえいえ、もちろん自殺など考えないほうがよろしいのですが。
何か苦しくなったとき、この店を思い出してください。

きっとあなたとお会いできると思います。

おや、お客様がいらっしゃいましたね。

今度の方は最後まで生きられますかね。
では。

C a s e 1 + e n d

Case 1-6 別（後書き）

一部終了です。

思った以上に時間がかかってしまいました。
すみません。

C a s e 2－1 少女（前書き）

第二部の始まりです。

また一人、自殺屋に出会います。

Case 2-1 少女

この世は汚れている。

テレビをつければ、親が子供を虐待しただの、誰かが誰かを殺しただのと人間の汚い部分ばかりが溢れ出てくる。

どのチャンネルを見ても同じようなことばかり言っているものだから、つまらなくて電源を切った。

少女は洗面所で化粧をする母の元へ行き、顔を合わせた。

鏡越しに母親が少女を見て一言だけ発した。

「今日は遅いの。」

決して自分を振り返らない母親をじっと後ろから見て、少女は「うん。」と同じように一言返した。

すると、母親は化粧を終えてコンパクトを閉じながら少女の方へと身を翻した。

「そう、私は加賀見さんの家に行ってくるわ。今日は帰らないからお父さんには何とか言っておいて。」

やはり目を合わせることはなく、母親はすたすたとリビングへと向かった。

足音が酷く冷たい。

少女は行ってきましたと言うことも、いつてらっしゃいと言われることもなく玄関を出た。

少女は17歳。しかし、少女が向かうのは学校ではない。向かう先は、カウンセリング。

別にいじめにあったわけでも、ほかに嫌な事があったわけでもない。ただ突然、学校という場所に行く意味がわからなくなった。なんのために学校へ行き、なんのために人と関わるのか疑問に思ってしまった。

それ以来、少女は学校へは行かなくなった。

両親は何も言わなかった。

少女が今唯一他人と関わる場所はカウンセリング。

そして、唯一関わる人間はカウンセラーの城田だけである。

部屋の前に着き、少女がドアをこんこんとノックすると、中から「どうぞ」と若い男の声がした。

声の主は城田。少女は中に入り、部屋の真ん中にあるソファに腰かけた。

城田はデスクから離れて少女の真向かいに座り直した。

「おはよう、今日は早いね。」

「家…いたくないから。」

俯き呟いた少女の顔を、城田が覗き込む。

堅く唇を食いしぼり、じっと床を見つめている。

「今朝はお父さんかお母さんと何か話した？」

城田が優しく訊くのに、少女はこくりと頷いた。

「何を話したの？」

「お母さん、また加賀見さんの家に行くって。今日は帰らないって言ってた。」

「…そうか。」

淡々と言う少女の肩に手を置いて、城田は隣に座った。

加賀見というのは、少女の母親の愛人である。

少女も一度見たことがあるが、髪を茶色に染めた見るからに軽そうな男であった。

母親が彼に色々と貢いでいるのは知っている。しかし、それを止めようと思ったこともしたこともない。勝手にすればいい、と思っていた。

父親は彼の存在を知っている。それでも何も言わない。

少女はそんな二人に嫌気がさしていた。

俯いたままの少女の横顔を見て、城田がにこりと微笑む。

「大丈夫だよ。きっとお父さんもお母さんもいつか気付くときがあるさ。今足りていないものに。」

そんな時がくるのだろうか。

そんなことはあるはずがないと、少女は誰よりも知っている。

そんな希望はこれっぽちも持っていないが、少女は黙って小さく頷いた。

「さあ、今日はどこにでかけようか。」

城田が着ていた白衣を脱いで白い壁にかけられたハンガーにかける。

少女がカウンセリングに来てすることは、専ら城田と遊ぶことだ。

昨日は街の中を一日中歩き回った。特にすることも無いのだが、こうしていることが今の少女にとっては一番いい。

生きる目的をなくしている少女にとって。

＋＋＋＋＋

一日中外で遊んだ少女は、城田に別れを告げ帰路についた。

足取りは重い。本当は帰りたくもない家。帰っても、誰もいない家。帰りたくない、と思いながらぼうつと歩いていると、いつの間にか知らない路地裏へと迷い込んでいた。

はっと気付いて、一気に不安になる。

「ここどこ？ 帰らなきゃ。」

くると振り返ってみる。しかし、そこにはやはりまったく知らない道。

どっちから来たのかさえわからない。

「城田さんに連絡……」

パーカーのポケットから携帯を取り出す。しかし、その画面の電波表示は圏外。

当然だが電話は通じなかった。メールすら送れない。

「どうしよう……」

途方に暮れた少女は、コンクリートの壁に寄りかかってその場に座り込んだ。

不安は増すばかり。こんなにも一人が恐いと思ったことはなかった。顔を伏せて、ぎゅうと身体を抱きかかえる。

「どうなさいました。」

頭上から男の声がした。

人だ。少女はぱっと顔を上げた。

しかし、男を見てそれが人間なのかと疑う。人間の形をしているが、何かが違う。

「どこかお体の調子がよろしくありませんか？」

丁寧に聞かれ、手を差し出されて少女は慌てて立ち上がった。

「いえっ：あの、道に迷っちゃって：」

少女がおおずおおずとそう言うのを聞いて、男は笑った。

「道に迷うほど幼いようには見えませんが。何か考え事でもしながら歩いていたのですか。おいでなさい。道を教えて差し上げます。」

男はくると少女に背を向け歩き出した。

すたすたと歩いて行ってしまう男の後を、少女は急いでついていった。

Case 2-2 図

男が向かっていったのは、小さな古びた店であった。

どこか周りと違う雰囲気のお店がぼつりとそこにある。男は擦り硝子の引き戸をカラカラと開けて中へ入った。

少女がゆっくり近付いて行くと、入り口のすぐ近くに店と同じ様に古びた看板が置いてあった。

その看板には”自殺屋”と表記されている。

見たことのないその名前に、少女は首を傾げる。ただわかるのは、ここが普通の店ではないこと。

看板の前で止まってしまった少女に、男は手招きをした。

「どうかなさいましたか。道、聞かなくてよろしいのですか。」

「あ、ごめんなさい。」

少女は扉の敷居の手前で一度戸惑ってから意を決して店に一步足を踏み入れた。

途端にぞわぞわと足の方から体を何かが這い回った様な感覚。

少女は一気に青ざめた。心臓がおかしな速さで鼓動する。

恐い。ただそう思うことしか出来なかった。

「どうぞ座って下さい。」

男が椅子を出し、少女をカウンターの前に座らせた。

本当ならばすぐにでも逃げ出したいのに、体は男の言うことに従ってしまう。

少女は恐怖のあまり声さえも出せなかった。

自分はこれからどうなってしまうのか、色々な考えが頭の中を巡る。どれも良い考えではないが。

「さて」

男がカウンターの上に紙を出した音で、少女の肩がびくりと跳ねた。手の震えが止まらない。

その少女を横目に、男は筆ですらすらと紙に地図を書き始めた。

紙の上で、筆は迷うことなく店から少女の家に辿り着く。

「この道が一番早いはずです。」

男から手渡された地図をしばらく見て、少女はおかしなことに気付いた。

この男には家の場所どころか名前すら教えていないのだ。

「え：な、なんで：」

「貴女のような人のことは聞かなくてもわかってしまうのですよ。

自殺を考えている人のことはね。

さん。」

男はにこやかに少女の名前を言い当てた。

決して有りきたりな名前ではない。たとえよく有る名前だとしても、当てずっぽうで当てられるものではない。

少女の体を、どんどん恐怖と不安が埋めていく。

「そんなに怯えないで。安心してください。ストーカーなどではないですから。」

にこりと笑いながら、男が少女の肩に触れる。

少女は自分の後ろに立った男をばっと振り返った。

「わ：私自殺なんか：」

生きることに意味を感じたことはないが、自殺を考えたこともない。男の言葉は理解できなかった。

「貴女自身気付いていないだけです。自殺を考えていないようで考えている方はこの世にたくさんいらっしゃいます。気付かないうちに自殺をしていた、なんて方は少なくないのですよ。」

少女はかたかたと震えながら首を必死で横に振った。

そして地図を握りしめ、店を飛び出す。男は扉の向こうでもう一度恐る恐る自分を振り返った少女にぺこりとお辞儀をした。

「お気をつけておかえりください。」

そのなんでもない一言が、酷く怖かった。

10分ほど走った所に少女の家があった。

あの店はなんだったのだろう。

握りしめた地図をゆっくりと開く。

しかし、そこには店の場所は記されておらず、真っ白な紙面が少女を笑っていた。

Case 2-3 規約

少女が自殺屋に出会ってから一週間が何事もなく過ぎた。しかし、一日も少女の頭の中を自殺屋のことが離れない。

少女はまた今日もカウンセリングに向かっていた。

歩いている間も、ずっと脳内で店の男の声が渦巻く。

耳の奥に残る、低い声。名前を呼ばれたときの、恐怖。思い出すだけで冷や汗が出てくる。

下を向いて歩いていた少女は、道に立っていた誰かにぶつかった。

「あ、ごめんなさい。」

「いえ：おや。」

顔を上げて驚愕した。そこに立っていたのは、あの男だったのだ。焦って周りを見回すと、いつの間にかそこはあの店のある路地だった。

賑やかだった街は、どこにもない。

「どうして：」

「いらっしやいませ。またお会いできるとは。」

「来たくて来たんじゃない！：帰ります。」

「お待ちください。やはり貴女は自殺を考えていらっしやるようですね。」

きっぱりと言われて、少女は男に言い返した。

「そんなこと考えてません！私は自殺なんかしない！」

「試してみますか。」

男は呟いてずっと少女の目に手を当てた。

そして、にこりと笑う。

次の瞬間、少女の目の前が真っ暗になった。次に見えた映像は、カウンセリングの部屋。

そこに、少女がいる。

椅子の上に立ち、輪にした紐を顎の下にかけ　椅子を蹴った。

がくんと全身の力が抜けて、少女は男に抱きとめられた。

「貴女が自殺するのが見えましたか。」

「な、何…今の…」

「見たのなら、それは貴女が自殺をする日です。…今とそんなに歳が変わらなかったでしょう。」

「な…」

「どうでしょう。騙されたと思って店を借りてみませんか。」

優しく男が言うのに、少女は断るのが難しくなってきた。

しぶしぶと頷き、男に連れられ店へと足を踏み入れる。

一步入った瞬間、この間と同じ感覚に襲われる。

店の男はつかつかとカウンターの中へ行き、椅子に座った。

少女もゆっくりとカウンターの前に立つ。

「前にも話しましたが、貴女のような人は多いのです。最初は皆さん店を借りるのを拒みますが、段々と慣れますよ。」

男は言いながらカウンターの前にカードを出した。

することもなくて下がったままの少女の右手を引き、乗せる。

「貴女の名前を思い浮かべてください。」

言われた通りにするとカードに少女の名前がじつくりと浮かび上がる。赤いカードに、しろ抜きの文字。

少女は驚きと恐怖で目を見開いた。

はつきりと少女の名前がカードに記されると、男は少女の震える手から自分の手を離し、椅子に座り直した。

「さて、ここにあまり長居するのは気が向かないでしょうから、手短にこの店を借りる上での諸注意をお話し致しましょう。まず、この店の本は貸し出し用です。もっとも買いたいと言う方はあまりいませんが…一応。本は一度に何冊借りても構いません。一冊でも十冊でも、必ず返して頂ければ。本を借りる時は左上から順に借りてください。一冊でも飛ばすことのないようお願い致します。読む時

は一字も飛ばさないください。よろしいですか、一字も、です。それから：この店のことは誰にも話さないください。ああ、あとそのカードはなくさない様子を付けてください。このくらいです。何かご質問はございますか。」

手短なのかと思ってしまうほど男の説明は少女にとって長かった。頭の中で懸命に今話されたことを振り返りつつ、頷く。話されたことの中に疑問に思うことはいくつかあった。

特に、一字も飛ばさずに読まなければならないということ。そんなことどう調べるのかと思ったが、この男の言うことは信じなければならぬ気がした。

「大丈夫：です。」

「そうですか。何か疑問点がございましたら、いつでも答えますので。くれぐれもお守り頂きますようお願い致します。さあ、今日は何冊借りて行きますか。」

「ただいま：」

少女はバックに二冊の分厚い本を入れて帰宅した。

誰もいない家の玄関を開け、靴を乱暴に脱いでリビングに入る。

冷蔵庫から適当に飲み物を出し、ソファに落ち着いた。

しばらく見ていた一冊目の本を手に取り表紙を開く。

そこで、すっかり城田のところに行き忘れたことに気付いた。

連絡をしようと携帯に手を出す、また後でもいいかと思い直し、本に目を戻した。

Case 2-4 闇

少女が自殺屋を借り始めて一ヶ月、最初あまり乗り気ではなかったが、いつの間にか違和感なく通うようになっていた。

いつものように店に立ち寄り、いつものように男に挨拶をする。つもりだったのだが、男はカウンターにいなかった。

入ってもいいものかと悩むが、本を借りるだけなのだからと思い、足を踏み入れる。

店の中はいつも以上に静まっている。

「あの…」

一言店の奥に声をかけるが、男が出てくることはなく、物音もしない。

少女の借りた本は三つ目の棚に入った。自分の借りていた本を手にも棚に向かう。

四冊を戻し、新しく五冊出した。と、そこでふと店の奥の方を見やる。

五つ目の棚から奥は、真っ暗で何も見えない。

しばらくそのまま闇闇を見つめていると、かたりと何か物音がした気がした。

少女は少し戸惑ったが、カウンターに取ったばかりの本を置き闇闇の奥へと進んだ。

一歩、また一歩と歩を進める。しかし、いくら歩いてもまた新しく闇闇が出てくるばかりである。

二十分ほど歩いただろうか。

棚は、終わりを見せる気配もない。

ただ真っ直ぐ、黙ってそこに立っている。

こんな小さな店、なぜ二十分も歩いて壁が見えないのか、恐怖すら感じる。

少女は途中で奥に向かうのを止め、元来た道を引き返した。

一本道の廊下なのに、迷うのではないかと思ってしまう。

また二十分ほど歩くと、五冊分の空きがある棚が見えた。

そこで少女はどきりとした。

その棚の前に、男が立っているのだ。じつとこちらを見つめて。

少女は一度足を止め、ゆっくりと男のいる方へ向かった。

少女が目の前まで来ると、男はにこりと微笑んで言った。

「棚の最後は見られましたか。」

「…いえ。」

「そうですか。…そういえば言いませんでしたね。不用意に店の奥に入らないでください。今回はよしとしますが、今度店の奥へ立ち入った場合は…わかっていただけますね。」

終始笑顔で話す男が、何か生き物ではないものと思った。

少女は一度頷き、カウンターに置いた本を持って店を飛び出した。

男は急いで去っていった少女を見送り、ほうきで店の前の掃除を始めた。

Case 2－5＋決意

一年が過ぎた。

少女はひたすら自殺屋の本を読むことに没頭していた。

本を読むことが、少女の生甲斐のひとつになったと言っても過言ではないだろう。

自殺屋の店主はなんの変わりもなく、そんな少女の姿を見ていた。

「こんにちは。」

「ああ、いらっしやいませ。」

少女は店に入り、にこやかに男に挨拶をした。男も同じように、微笑んで返す。

持っていた本を棚に戻すと、新しい本を手にとり少女はカウンターの前に置いてある椅子に座った。

男がじっと少女を見ると、少女はにっこり笑って話を始めた。

「私、もう一度学校に行くことにしたんです。」

「おや、そうですか。」

「ずっとこのままにいるわけにもいかないし、城田さんや自殺屋さんに勇気を貰った気がするから。私、自分で自分が変わったと思うんです。」

「ええ。私もそう思いますよ。貴女の心からは大分自殺の影が薄れていっています。良い傾向ですね。」

「ありがとうございます。でも、もう少し、この店の本を読みきるまで借りていてもいいですか？」

「もちろんです。是非読みきってください。」

男がこくりと頷くと、少女は嬉しそうに笑った。

一年前の少女の姿は、もうどこにもない。

椅子から元気に立ち上がると、男に笑顔で「また。」と告げ、本を持って外に飛び出していった。

「城田さん！」

少女が帰りがけに向かったのはカウンセリング。学校のことで忙しく、ここに来るのは一週間ぶりであった。はしゃぎながら部屋を覗き込むと、城田は少女に気づいて手招きをした。

「久しぶり。元気そうだね、よかった。」

「うん！私、学校に行くの。」

少女がそう報告すると、城田は心から喜び祝福をしてくれた。しばらくすると、少女をソファに座らせ、正面に座って真面目な面持ちになった。

真っ直ぐに少女の目を見つめ、口を開く。

「俺、君のことが好きなんだ。本気だよ。歳は離れているけど、絶対に後悔させない。付き合ってくれないか。」

城田の突然の告白に、少女は戸惑った。

次いで嬉しそうにはにかみ、強く頷く。

「嬉しい。ありがとう、城田さん。」

その時、少女のかばんが倒れ、中から五冊の本が崩れ出た。ごとりと本が床にぶつかる音がして、少女は慌てて本を拾い上げた。その様子を見て、城田は不思議に思った。

只の本を、なぜそんなにも焦って隠すのかがわからなかった。

「それ、なんの本？」

城田に尋ねられて、少女は少し困った顔になった。

頭の中で、自殺屋の男の声が廻る。

『この店のことは誰にも話さないでください』

その忠告を忘れたわけでは当然ないが、少女は自殺屋の話を城田にした。

自殺屋との出会い、店主の人柄、本の内容。所々で城田に誰にも言わないよう念押しをしながら。

全てを話し終わると、城田はあまり良い顔をしなかった。

「あまりその店、行かないほうがいいかもしれない。」

「どうして？」

「何か変な感じがしない？ちょっと怖いよそれ…」

「でも自殺屋さんは凄く良い人なの。きっと大丈夫だよ。」

城田は嫌な予感がしていた。

その予感がそれほど時間をおかずに現実になる。

Case 2-6 別

少女が城田と付き合い始めてもうすぐ一ヶ月。

少女は軽い足取りで自殺屋に向かった。

珍しく店の扉が閉まっている。手をかけて横に引いても、扉はかたくなに少女が中に入ることを拒んだ。

「…また今度来ようかな。」

少女は本の入ったバックを肩にかけなおし、店の前をあとにした。

「城田さん！」

部屋に入った少女は、机に伏せてしまっている城田に声をかけた。気だるそうに上半身を起こし、少女を見る。

その顔は、酷く青ざめている。

「…城田さん？」

少女はゆっくりと近寄り、城田のそばに座った。

俯いたままの城田が、口を開く。

その口からは信じられない言葉が飛び出した。

「……人を…轢いてしまったんだ…。」

「え!?!」

「少し疲れて…うたた寝をしていた……こんなことになるなんて…。」

「ね、ねえ、その轢いちゃった人はどうしたの!?! 病院に連れて行ったんでしょ!?!」

少女の必死の問いかけに、城田は首を横に振った。

「…即死だった……人も見ていなかったから…すぐその山に捨ててきたんだ…。」

「そ…そんな……そんなのすぐに見つかっちゃうよ…城田さん捕まっちゃうよ…!」

体を震わせて動揺する少女の肩を、城田が突然掴んだ。

その手は、酷く冷たく、震えている。

目からは涙が流れていた。

「ごめん…君を守れなくて…」

「え…？」

「……………一緒に死んでくれないか」

思ってもみなかったその一言に、少女は衝撃を受け、怯えた。

これはつまり、心中ということであろうか。

自殺という考えを捨て始めていた少女に降りかかった、究極の選択。

愛する人を見捨て、一人この世界で生きるか

愛する人と共にこの世界から消えてなくなるか

選べるものは、二つに一つ。

少女は俯き悩んだ末に、首を一度縦に振った。

途端に何かが決壊したように涙が溢れる。

体の震えが止まらない。

その体を、城田が強く抱きしめた。

耳元で、何度も何度も「ごめん」と呟きながら。

「それじゃあ、先に。」

真っ暗な部屋の中、静かなその空間に、がたんと椅子の倒れる音が大きく響いた。

城田の体重に引っ張られ、ロープの軋む音が生々しい。

数分して、もがいていた城田の体が動かなくなった。

力なく垂れ下がった手は、もう、冷たい。

しばらく手を握った後、少女はその隣の椅子に立ち、自ら首にロープの輪を掛けた。

椅子がぎしりと軋む。

「さようなら。」

この世に別れを告げ、少女は椅子を勢い良く蹴った。

部屋の中には

二体の 首吊り死体。

その手は強く強く握られたままだった。

ああ、逝ってしまわれましたか。

残念ですね。規約を守ってさえ頂ければ、残りはあと五冊だけでしたのに。

なんと儚い。

男は部屋の中央、机の上に積まれた六冊の本を手を取った。

少女が借りていったものは、五冊。

残りの一冊には、少女の名前が記載されていた。

この本は、少女の一生を綴ったもの。

少女が自殺をするまでの、経緯。

また、一冊本が増えてしまいましたね。

溜め息ひとつ。

男は少女にぺこりと一礼し、部屋を後にした。

C a s e 2 + e n d

C a s e 2－6＋別（後書き）

待っていてくださった方々、更新が遅く、本当に申し訳ありませんでした。

これから出来る限りの早い更新を心がけたいと思います。

もう少しこの自殺屋、続きますので、お付き合いいただけたらと思います。

C a s e 3－1＋興味（前書き）

また新しくストーリーが始まります。

今回も終わるまでにどのくらいかかるかわかりませんが、出来る限り早い更新を心がけたいと思います。

Case 3－1＋興味

「自殺屋って知ってる？」

「ああ、知ってる知ってる。」

「自殺屋？」

「自殺の本がいっぱい置いてある店だよ。自殺しようと考えてる奴が行く店なんだってさ。」

「へえ、そんなのあるんだ。」

「まあ見たことないけど。」

「でも知ってるか？その店、色々規則があって、それを破った奴は、自殺して変わり果てた姿で見つかるんだってさ。」

こんな噂話が、最近学校で流行っている。

少年は十八歳、高校三年生。

三年といえば大学受験を控え、夏の今頃、六月にもなれば受験勉強に追われているはずである。

しかし少年は他の同級生ほど根を詰めて勉強をしてはいなかった。

なぜならば、その必要がないからだ。

彼は昔からそれほどの努力をしなくても人以上の能力があった。

両親が秀才ゆえにそうなのかはわからないが、学校で習うことは大抵授業を聞いていればほぼ理解でき、予習復習などということは滅多にしない。

考查前にほんの少しノートを見る程度で、ほとんどのテストは九十点台になる。

生まれながらにしての天才ということだ。

スポーツもその他のこともそつなく何でもこなし、容姿も整っている。

両親はどちらも立派な職業に就いていて家も裕福となれば、当然誰

もが彼をうらやんだ。

進路も有名国立大学のK大学に決め、少年はなんの不幸せを感じることなく生活をしていた。

「あ、やばい俺塾行かなきゃなんだ！」

「塾？大変だねえ。」

「お前と違って勉強しなきゃ出来ないからな。いいよな、勉強しなくてもできちゃう奴は。」

「学校で授業ちゃんと聞いてれば簡単じゃないか。」

「馬鹿、そこがお前と俺の頭の差だって。じゃあまた明日な！」

「ああ。」

塾に向かった友人を見送り、少年は誰もいなくなった教室を見渡した。

先ほどもでクラスメイト達が騒いでいた噂を思い返す。

『自殺屋』という店の存在が確かなもののかはわからないが、少し興味は湧いた。

そもそも自殺というものがどんなものなのか、少年は考えたこともなかったのだ。

もし本当にそんな店があるのならば、その本を読んでみたい気もした。

「馬鹿馬鹿しいな、そんな店あるわけじゃないじゃないか。」

たかが噂に、考えすぎじゃないかと自嘲して、少年は教室を後にした。

そんな噂でしかない自殺屋に、彼はすぐに出会うことになる。

「おっと。」

「あ、すみません。」

ぼうっと考え事をしながら歩いていると、少年は一人の男と正面衝突した。

その衝撃で、男の持っていた黒い袋がどき、と音を立てて地面に落

ちる。

少年が落ちたその袋を拾おうとしゃがむと、その中から数冊の本が姿を覗かせていた。

その内の一冊だけ、タイトルが見える。

『自殺のすすめ』

そんなタイトルは見たことがない。

少年は少し怪訝そうな顔をしたあと、袋を拾い上げ、男に渡した。

「申し訳ありません。」

丁寧にお辞儀をしたその男は、黒い帽子を深くかぶり、顔は下半分ほどしか見えない。

結構な長身で、なんだか不思議、というよりは不気味な印象だった。

「あ、いや。俺こそすみません、ぼーっとしてたから。」

「それは私からですから。…高校の帰りですか？」

「え、まあ。」

「そうですか。お気をつけてお帰りくださいね。」

「はあ、どうも。」

現代の日本で、たかが高校生に対して珍しい話し方だな、と思いなから男とすれ違い、帰路に戻る。

数メートル歩いたところで、本のことを思い直す。

「自殺のすすめ……自殺？」

もしやと思い、すぐに振り返る。

しかしそこにはもう男の姿はなかった。

少年は少し残念に思っ、もう一度家の方向に身体を向ける。

するとそこには、すれ違ったはずの男が立っていた。

「うわ!？」

「何か御用でしょうか？」

「えっ…あ、あんたなんで……さっき…」

そこに男がいるという状況が巧く理解できず、少年は少しうろたえた。

まず何を言ったらいいのかわからない。

「ああ、すみません驚かせて。あなたが何か私に用事があるように見えたので。」

「え？」

「何もありませんでしたか？そうでしたらお引止めして申し訳ありません。」

「あっいや、あの……もしかして、自殺屋さん……？」

少年が恐る恐るそう尋ねると、男は一瞬あっけに取られたような顔をしてから、にこりと笑って頷いた。

「ええ、そうですが。よくご存知ですね？」

自殺屋などという禍々しい名前の店を経営しているわりに、優しそうな人だな、と少年は内心ほっとした。

規則を破った人間は自殺をするという噂を聞いていたので、もっと人を呪っているような人間が店主だと思っていたのだ。

「何か御用がお有りですか。」

丁寧に聞かれて、少年は困った。

特にこれといってはっきりとした用事があるわけではない。

ただ、少し興味を持った店の店主に思わぬ形で会え、思わず聞いてしまったのだ。

何をどうする、ということもない。

「えっと……その……」

「自殺を、お考えですか。」

戸惑う少年に、店主は一言尋ねた。

その言葉に、少年の顔が強張る。

店主の目が、生き物の目以外のなにかに見えた。

緊張でも恐怖でもない感覚。身体が動かない。

「違いますか。」

「ち……違います……俺、自殺なんて考えて……」

今の生活になにも不満も不安もないのだ。自殺など、考えたこともない。

ただどんなものなのか、知りたいだけ。

「：そうですね。ならばお帰りなさい。あまり私と関わっても良いことはありませんよ。」

男は少し、ほんの少しだけ微笑んで、少年に小さく会釈をし、身を翻して人混みに消えていった。

少年は一人残され、しばらくは現実とかけ離れた感覚に襲われその場に立ち尽くしていた。

Case 3-2 再

少年が自殺屋の店主に出会ってから一週間が過ぎようとしていた。少年は、学校の帰りに何度も店主と出会った付近をうろろと徘徊した。

それでも、彼の姿はどこにも無い。もう会えないのだろうか諦めかけていた。

しかし今日は違った。

いつもと同じように同じ道を歩いていると、人一人がやっと通れるくらいの細い路地を見つけた。

路地というよりは建物の隙間という感じである。

こんなところに道などあったのだろうか疑問に思い、悩んだ末に少年は路地の奥へと歩を進めた。

段々と路地は広くなり、やがてT字路に当たった。

現代の日本にこんなところがあったのかと驚いてしまうような景色だった。

数件の古びた住宅が並び、人気がない。

家の扉は、ガラス張りの引き戸がほとんどである。

なんだか怖くなり、引き返そうと振り返った。

そして少年は更に驚く。

先ほど通って来た筈の道が、跡形も無く消えてしまっていた。

あまりの恐怖と不安に、少年は自分の周りだけ重力が増したような感覚に襲われた。

足がまるで玩具になってしまったように動かない。

おそらく顔色は最悪だろう。本当に血の気が引くとはこういうことかと、十八年生きてきて初めて知った。

もう二度と家に、自分の生きていた世界に帰れないのだろうか、少年はこの場所に踏み入ったことを人生で一番後悔した。

自殺屋などというおかしな店を追ったのがよくなかったのだろうか。

あの男の言うとおりに、関わらないほうが良かったのかもしれない。少年がどうすることも出来ずに壁を見つめたまま立ち尽くしている。と、後ろから誰かが肩をぽんぽんと軽く叩いた。

一瞬恐怖で体が竦むが、意を決して振り返る。

するとそこには、一週間ほど前に出会った、自分が探していた男が立っていた。

先日会ったときと変わらぬ姿、雰囲気だ。

「ああ、あなたですか。また会ってしまいましたね。こんなところで何をなさっているのですか？」

少々呆れたような笑みを浮かべ、男は少年に問うた。

やはり来ないほうがよかったのだろうか？と少年は申し訳なく思いながら、嘘をつくのは良くないだろうと思い、自分が自殺屋を探していたことを正直に話した。

すると男は羽織っているだけの着物をひらりと羽織直し、少年に背を向けた。

「わかりました、ついてきてください。すぐそこです。」

少年の顔を見ずにそう言うのと、すたすたと歩き出す。

だいぶ戸惑ってはいたが、こんなところで立っていてもしょうがないと、少年は自分を置いて歩いて行く男の後ろを急いで追いかけた。

数十メートル歩いたところにその店は黙って佇んでいた。

周りの住宅と同じようなガラス張りの引き戸は薄暗い店内を覗かせている。

店の前には古びた看板があり、そこには『自殺屋』と書かれていた。文字は多少擦れ、それが一層自殺屋の怪しさと不思議さ、そして恐ろしさを醸し出す。

男が店の中に入るのを見て、少年は足を止め、店に入るのを渋った。入っても大丈夫なのか怪しいところである。

入ったならば最後、出てこれないのではないかと、悪い想像ばかりが頭の中を廻る。

少年が店の敷居を見つめたまま動かないでいると、先に店に入った男がガラス戸の隙間から顔を出した。

しばらく少年を見つめると、暗闇からぬっと左手を出し、小さく手招きをする。

その仕草が余計に恐怖を駆り立て、少年は表情を固くした。

「大丈夫ですよ。獲って食べたりしませんから。自殺屋について説明致します。どうぞ中へ。」

にこりと笑顔を見せると、再び店内へと姿を消した。

相変わらずそこには暗闇と静寂が鎮座している。

少年は数十秒そのまま動かず見えない店の中を睨み、そちらへむかって足を踏み出した。

Case 3－30 日常

店の中は、外から見るとよりは多少明るかった。

もつとも店の奥は暗闇で何も視認することは出来ないが。

噂通り、店内の壁伝いに大きな本棚が並んでいる。

三つ目の棚までは見えるのだが、そこから先は暗闇に覆い隠され何も見えない。

この店の奥の壁は、どこにあるのだろうか。

「こちらへどうぞ。」

じっと店の奥を睨んでいた少年に、男が声をかけた。

振り返ると、小さなカウンターに男が座っている。

その手が指した場所には、黒いソファがあった。

革製の、少々値が張りそうなソファである。

なんだかそれが店の雰囲気にならず、少年は怪訝そうな顔をした。

黙ってソファに座り、正面の男を見つめる。

相変わらず深く被った帽子で口元しか見えない。

少年が気になって顔を覗き込もうとすると、男の口角が微かに上がった。

「私の顔が気になりますか。」

「え、あ……すみません。」

「いえ、構いませんよ。別に隠さなくてはならないほど恐ろしい顔ではありませんから。」

そう言うと、男はゆっくりと帽子をはずした。

予想以上に整った顔である。この容姿ならば、世の女性は十人中七、八人は格好良いと言うに違いない。

しかし、漆黒の瞳に光は無い。

「さて、あなたはこの店を探していたのですね？」

「……はい……。」

「なぜですか？」

たった一人の男に見られているだけなのに、百匹の虎に睨まれているような感覚。

冷や汗が少年の頬を伝った。

言葉を発することを拒否する喉を無理に開き、声を絞り出す。

「自殺ってどんなものなのか、知りたくて……。」

恐る恐る消え入りそうな声で呟いた少年をまじまじと見つめた後、男はすっと立ち上がり、少年の背後に歩み寄った。

すうっと肩に手を置かれ、少年が身を固くする。

その手は酷く冷たい。本当に血が巡っているのか疑ってしまう。

「自殺がどんなものか、ですか。」

「……。」

「自殺とは決して逃げではありません。当然自殺をする人間には個人個人それぞれに理由があります。他人にとってはくだらないことであっても、その人本人にとってはとても重いこともあります。それに耐え切れず、死を選ぶこと。それが自殺です。」

「それが、逃げじゃないんですか？」

「あなたは自殺は弱い人間がするものだと思っていませんか？」

「え、まあ……。」

「それは間違った認識です。この世で生きる人間は、誰もが弱いのです。本当に強い人間など、一人も存在しません。」

そこまで言い終えると、男は本棚に向かい、その中から一冊の本を取り出した。

それを、少年に見せる。

「この店に貯蔵してある全ての本には、自殺に関わることが記載されています。自殺がどんなものなのか、どんな人間が自殺をするのか、その自殺の理由など様々です。きっとあなたはこれらの本を読めば、自殺がどんなものなのか知ることができますよ。」

「自殺がどんなものなのか……。」

「ですが、この店を借りることはあまりお薦め致しません。」

男は少年から目を逸らし、本を棚の隙間に戻した。

ことりと、本と棚のぶつかる音が異常に大きく店内に響く。

少年は男の言葉に、わからないという風な表情をしてみせた。

男は少年の側に戻り、もう一度口を開いた。

「あなたのように興味本位でこの店を借りた方は今までにもいました。ですが、そのような方達は皆、自殺をして亡くなっていらつしやいます。この店の本の影響に、負けてしまったのです。」

想像してみれば、絶え間なく自殺ばかりについて書かれた本を読むのだ。

気がどうかして自殺をしてしまってもおかしくないだろう。

その話を聞いて、少年は俯いてしまった。

この店について、自殺について知ることを、迷う。

自殺屋に会ったというのは全て夢だったと自分に言い聞かせ、家に帰ってしまえばいつも通りの生活が待っている。

何も知ろうとしなければ、今までと何も変わらない幸せな日常が続く。

それでも、自分の知らないことを知りたいと思うのは、人間故の性だろうか。

「……わかりました。後悔はなさいませんか？そこまで言うのですたらお貸し致しましょう。」

じっと黙った少年の様子を見て、男は小さな溜め息と共にそう言った。

その言葉に、少年が間をおいて頷く。

男はカウンターの中间に戻り、引き出しから一枚のカードを出した。

灰色のしつかりしたカードである。

ぱちんと音がして、カウンターの上面に置かれたそのカードには何も書かれていない。

四角く名前を書く欄があるだけ。

男はその欄を指差す。

「ここに手を置いて、名前を思い浮かべてください。」

言われたようにすると、段々とその欄の中に名前が浮かび上がった。「いいですか、これから守って頂かなくてはならないことを話します。しっかり覚えてお帰りください。」

「ただいま。」

「おかえり。すぐにご飯になるわ。」

「うん、少し部屋にいるよ。用意できたら呼んで。」

家に着くと、母親がいつ通り迎えてくれた。

少年は返事もそこそこに階段を上り、廊下の突き当たりの自室に入った。

心なしか元気の無い息子を心配そつつ、母親は台所に戻る。まもなく、家の中に包丁の軽快な音が響いた。

少年は部屋の左隅に置いてある机の上に鞆を適当に投げ、向かいのベッドにゆっくりと腰を下ろした。

しばらく置いた鞆を見つめ、そのまま後ろに倒れた。

ぼすんと音がして、鼻を太陽の香りが掠めた。おそらく母親が布団を干したのだろう。

目を閉じると、耳の奥で男の言葉が自然と繰り返された。

「いいですか、本は必ず棚の左上から借りてください。それから、読むときには一文字も飛ばさないでください。一文字も、ですよ。」説明された規約の中でもっとも頭に残っている部分。

一文字飛ばしたからといって、それをどう調べるというのだろうか。現実的に考えればどうやっても無理なことだが、少年は男に尋ねることはしなかった。

しばらく寝転がったまま考え事をし、起き上がって鞆の中から本を取り出す。

ハードカバーの分厚い本を開く。

綺麗に並んだ文字を読んでいくうちに、いつの間にか引きずり込まれるように没頭していった。

Case 3-4 謝

「おはよ！」

「あ：おはよう。」

登校中、友人に後ろから声をかけられた。今日は朝から眠気が酷い。昨夜自殺屋の本に夢中になり、深夜までかけて三冊全て読みきったのだ。

睡眠時間は当然足りていない。

「なんか顔色悪いけど大丈夫か？」

心配する友人に何かを悟られないよう、少年は無理に笑顔を作り、一歩先を歩いた。

自殺屋に出会ったことが、借りたことがばれてしまえば、すぐに噂になるに違いない。

学校で人気のある秀才の少年が自殺を考えているなどという噂が流ればきつと騒ぎになるだろう。

それは少年のプライドに傷がつく。

それに、自殺屋の規約の中に『他人に自殺屋のことを話さない』というものがあった。

破ればどうなるかわかったものではない。

四時間目が終わり、数人の友人が少年をバスケットボールに誘った。普段ならばすぐにでも参加するのだが、今日ばかりはその提案は受け入れられなかった。

出来る限り鞆から離れたくない。中に自殺屋の本が入っているから。これが見つかってしまえば、どうにかばれないよう隠している努力が水の泡である。

放課後になり、教室には数人の男子が集まっていた。

その中には少年もいる。

早めに自殺屋に向かいたかったが、急に人付き合いが悪くなったら怪しまれるだろう。

多少ならば時間が取れるので、少しくらいこの普段のメンバーで騒いでから行くのもいいかと思った。

「あ、そういえばさ、近藤ってどうしたんだろうな？」

ひとりの男子がクラスメイトの名前を出した。

近藤とは、二年の時にいじめに遭い、登校拒否になっている生徒のことである。

こんな風にふと会話に出てくることがある。

「え、知らないの？近藤って死んだって話だよ？」

「え！？何で、病気！？」

「そんなわけないじゃん。自殺したらしいよ。」

少年の心臓がどくりと脈打った。

『自殺』という言葉に自然と反応する。

「だって自殺したならさすがに新聞に載ったり先生とか言うんじゃないの？」

「まあ噂だからな。でもそのうちするんじゃないの？あいつ生きててもしょうがないって！」

ふざけて笑いながら話す友人達を、少年は黙って見つめていた。

自殺がどんなものなのか少しでも知った今、こんなにも友人達の話すこの話題が重いものだったのかと思う。

こんなにも無責任なものだったのかと思う。

自殺などというものは、そんなに簡単に口に出せるものではないと思う知った。

「こんにちは：」

「ああ、いらっしやいませ。」

疲れ果てた様子で店に入ってきた少年を、男は笑顔で迎え入れた。その様子がおかしいことに気づき、そっと肩を押してソファに座らせる。

「どうかなさいましたか。」

男が静かに尋ねると、少年は床を見つめたまま口を開いた。

「あの…自殺って…：すごく、辛いことなんです…：俺…今までなんにも考えたことなかった…」

この言葉を聞いて、男は「やはり」というような顔で溜め息をついた。

ずっと少年の前にしゃがみ、その震える手に触れる。

「ですからお薦めしませんと申しましたのに。申し訳ありませんが、この店の本を最後まで読みきるまでは返却は受付けられないのです。そうでなければ、あなたが自殺をすることになりますので。」

男がそう言うのに、少年は首を横に振って応えた。

「返却はしません…：俺は自殺をする気はありません。」

「…そうですか。それならばいいのですが。」

男はじっと少年を見つめた後、俯いて立ち上がった。カウンターに戻り、ぱらぱらと本を捲る。

その様子をしばらく窺っていた少年が、口を開いた。

「…あの…」

「なんででしょう。」

「この店を…近藤っていう人が借りたことありませんか…」

「近藤様…いえ、この店にはそのようなお名前の方は来たことがありません。…なぜですか。」

なぜなのだろうか。

気にもしたことが無い近藤のことが、不思議なほど気になった。

もしも本当に自殺を考えているのだとしたら、この店に訪れているかもしれないと思った。

この店に来ていないということは、自殺をするつもりはないということなのだろうか。

「…学校で、いじめに遭って登校拒否になってる奴がいて…：そいつが、もしかしたら自殺するんじゃないかって…」

「心配なのですか？」

男に言われて、はっと気がついた。

自分が興味もなかった、話したことすらない人間を心配している。

そんな自覚はなかった。

これは心配なのだろうか。いや、どちらかといえば、同情に近いのではないだろうか。

「…同情、ですか。」

少年の心を見透かしたように、男が呟いた。

自分よりも立場の弱い人間に同情をしてしまった、そのことに嫌悪感を覚える。

自分はこんなにも嫌な人間だったのかと、自己嫌悪した。

「おや、いらっしゃいませ。」

突然男が開いたままの扉を見て言った。

咄嗟にそちらを見るが、人の姿はない。

少年が不思議そうな顔を見ると、男は少しそちらを見て、すぐに俯いた。

そしてまた扉の方を見る。

「…近藤様、ですね。」

その名前が出たことに、少年は驚いた。

悪い冗談かと思ったが、その男の表情はとても冗談を言っている風には見えない。

しかも、徐々にその扉の前に何かの存在を感じるようになってきた。そこに何か、誰かがいる。

「近藤……？」

「ああ、残念ですね。自殺をする前に、この店を訪れて頂きたかった。」

その言葉は、近藤が自殺をしたことを示していた。

男の表情は、酷く悲しそうである。

「あなたが強く思ったことで、ここに引き寄せられたのでしょいうね。もう少し早ければ、自殺をする前に来られたかもしれません。」

「そんな……」

男はカウンターから出て、扉に向かった。

そして、その見えない存在の横に立ち、肩に触れる仕草をした。

そのことで、はっきりとその姿が見えるようになる。

そこに立っていたのは、少しやつれた近藤だった。

「近藤……」

「あなたに感謝しているですよ。」

「え？」

「誰も気に留めてくれなかった自分の存在を思い出してください。……よかったですね。自殺をした方の多くはこの世に恨みなどの想いを強く持ち、成仏できません。ですが、近藤様の心にもう恨みはないようです。」

男がそう言って近藤を見ると、近藤は少年を見てにこりと笑った。

「ありがとう、僕のことを思い出してくれて。心配してくれて。僕が自殺したこと、誰にも言わないで。その内わかることだと思うから、それまでは言わないで置いて。」

そして、その体がゆっくりと光へと変わる。

見たことの無い、神秘的で、少し怖い光景だった。

近藤の姿が完全に見えなくなると、少年は口を開いた。

「どうして……こんな小さなことで……今まで近藤がされてきたことに対して小さすぎるよ……」

「それでいいのです。追い詰められている人間にとってはどんなに小さなことでも大きく感じるものです。あなた一人が彼を想ってくれただけで、彼はとても嬉しかったのですね。」

何かが決壊したように涙が止まらなかった。

罪悪感と不思議な安心感が少年の心に溢れる。

男は少年に新しく三冊の本を渡し、そっと背中を押した。

「早めにお帰りなさい。泣きはらした顔で学校へ行ったら、あなたの友人が心配しますよ。」

Case 3－5十崩壊

自殺屋と少年が出会って三ヶ月。

少年の読んだ冊数はもうじき九百冊になろうとしていた。

しかし、少年の頭の中に自殺の知識が増えることと反比例して、学校の授業やその知識はだんだんと減っていった。

まるで何かに洗脳されたように自殺屋の本を読み漁った。

授業中の居眠りが増え、人付き合いが以前よりも悪くなり、少年に対する周りの印象は変わっていく。

そのことに少年は薄々気づき始めていた。

このままではいけないと何度も思うが、異常なほどに自殺屋の本を読みたくなる。

店を借りるときに店主が言っていた言葉が頭をよぎった。

『興味本位で店を借りた人間は、皆自殺をしている』

ふと自分もそうなるのではないかと思う。

そう考えていると、酷く怖くなった。

もしかしたら、もう自分は自殺への道を歩んでいるのではないだろうか。

それでも、自殺屋の本は少年を惹きつけて離さなかった。

「こんにちは。」

「いらっしやいませ。」

いつもと同じ挨拶を交わし、少年が本棚に向かう。

すると男がその後を追いかけて、後ろから右の手首を掴んだ。

少年は不思議そうに男を見て首を傾げた。

「何ですか？」

「…………どこへ、行くのですか。」

その男の言葉が意味することがわからない。

本を取りに行こうとしているだけなのだ。

特にどこへ行くわけでもない。

「本を、取りに行くんですけど：何かまずいですか？」

「……いえ、失礼しました。どうぞ。」

そう言っただけで手を放す。

少年はそれと同時に店の奥へと消えた。

男はしばらくその後を見つめ、カウンターに戻る。

そこには、少年のカードが置いてあった。

そのカードにうっすらと短いひびが走っている。

そっとそのカードを手に取り、男はぽつりと呟く。

「やはり……。」

そのひびが、少年の今の状況を指し示していた。

崩れ始めて、いた。

男の『どこへ行くのか』という問いに、意味がなかったわけではない。

少年は徐々に本人も気づかないうちに、どこか離れたところへ向かっていった。

がしゅんと店の外で派手に何かが転がる音がした。

男が店の外を覗くと、自殺屋の看板が地面に伏してしまっていた。

「おやおや。」

店から体を出し、しゃがんで看板を起こす。

すると、ネジが取れて土台の骨組みから看板が剥がれ、がらんと音を立てて倒れた。

「ああ：直さないといけませんね。」

びゅうと強く風が吹き、男の帽子が高く舞い上がった。

それを目で追い、男はすっと立ち上がった。

見上げた空は、どんよりと暗く沈んでいる。

黒ずんだ雲は重たそうにこちらを見下ろし、今にも落ちてきそうである。

「嫌な天気ですね。」

ざわざわと木の揺れる音が不気味に路地に響いた。

Case 3-6 破

酷く気持ちが落ち込んでいた。苛々もしていた。

一ヶ月ほど前に行った模擬試験の結果がよくなかったことを、担任の教師に咎められたのだ。

「最近居眠りも増えて、生活自体が狂っているんじゃないのか。」そんな風に言われて、これまでにないほど苛立っている。

生活が乱れているのは事実なのだが、それが自殺屋の本の為だとは口が裂けても言えない。

そんなことを言えば、頭がおかしくなったのではないかと思われてしまう。

それに、規約のこともある。

しかし正直、規約など半ばどうでもよくなっていた。

どれもこれも、調べようのない規約ばかりなのだ。

誰かに話そうが、文字を飛ばして読もうが一体それをどう調べるといいのか。

少し馬鹿馬鹿しく思えた。

むしろくしゃしていたから余計そう思ったのだろう。

家に帰ってきた少年は、鞆を乱暴に壁に投げつけ、ベッドに体を沈めた。

枕元に置いてあった本が目に入る。

少年はそれを手に取り、しおりを挟んでおいたページを開いた。

読んでいるのは百二十四ページの八行目まで。

本当ならば九行目から読まなければならない。

「……馬鹿馬鹿しい！こんな時間かけて読んでられないよ！」

ばらばらと適当にページを飛ばし、二百ページを開いた。

その一行目から読み進める。

別に物語ではなく、一個人の自殺理由が書き連ねてあるだけなので、飛ばしても支障はない。

自殺に対する興味というよりは、少年の気持ちは本を読みきることだけに向いていた。

それが、この少年の運命を変えてしまった。

「こんばんは。」

深夜二時に、少年が店を訪れた。

カウンターで本を読んでいた店主が顔を上げる。

「いらっしやいませ。」

少年は男の前に本を八冊置いた。

「十冊貸してください。」

少年がそう言うと、男はその顔をまじまじと見て、すっと立ち上がった。

カウンターから出て、少年とすれ違う。

「わかりました。そこでお待ちください。今度からは私が本を棚からお持ち致します。十冊、ですね。」

少年がこくりと頷いたのを目の端で確認して、男は店の奥へと消えた。

数分して戻ってきた男の手には、十冊の本が抱かれていた。

「重いですよ。大丈夫ですか。」

「大丈夫です。」

少年は男の様子を窺いながら本を受け取る。

特にいつもと変わったところはない。

やはりあんな規約はたんなる脅しだったのだろうか。

よくよく考えれば数ページ飛ばしたくらいで何があるのか。

本当に馬鹿馬鹿しい。

「……また来ます。」

「はい、お気をつけて。」

少年は本を抱えて帰宅した。

男がその背中を見送り、カウンターに戻る。

すると床に少年のカードが落ちていた。

「おや。」

しゃがんで拾うと、それは真ん中から真二つに割れてしまった。手に持っていなかったほうの欠片が、床にぱたりと落ちる。それを見て、男は悲しそうな顔をした。

「やはり…駄目でしたね。」

そして、そのカードをカウンターの引き出しにしまい、店の扉を閉めた。

自殺屋の看板が、風に揺られてキィと不気味な音を立てた。

Case 3－7 別

少年が自殺屋を借りて八年もの月日が経過した。十八歳だった少年も、すでに二十六歳という立派な大人になっていた。

しかし、少年は未だに自殺屋の本を読んでいる。借りた本はすでに二万冊を超えた。

しかし、後半のほうは真面目に読んでいない本が多かった。一体この店の本はいつになったら読み終わるのだろうか。

少年はほとほと嫌になり始めていた。

いくら読んでも終わりが見えない。

そのことを聞いてみようと、少年は店を訪れた。

「こんにちは。」

「ああ、いらっしやいませ。」

この店主は、八年も経つというのに少しも変わっていない。雰囲気も、外見も。

まるで歳をとっていない。

「……あの」

しばらく男を眺めていた少年は、口を開いた。

「この店の本、いつになったら読み終わるんですか。八年も借りていて終わらないなんて、どうかしてます。いい加減店を返したいんですけど。」

その言葉を聞いて、少しの間のあと、男は「ああ。」と気付いたように少年を見た。

その口から出た言葉は。

「この店の本、終わりませんよ。」

信じられない一言だった。

今までここに通いつめ、全て本を借りようとしてきた自分は一体なんだっただろうか。

そう思うと、男に対する怒りが腹の底から湧いてきた。かっとなつて、男に掴みかかる。

「どういふことですか！俺は一体何の為にここの本を今まで読んできたんですか！」

「自殺のことが知りたかつたのではないのですか。」

男は少年の手をぱしんと振り払い、椅子に座りなおした。

「きちんと本を読んでくだらない方に、この店の最後の本はお見せできません。あなたがしてきたことは、今まで自殺をしてきた方の人生を侮辱することですよ。」

「……っ！知ってたんですか？でも、だったら言ってくれてもいいじゃないですか！」

「言いましたよ、最初に。興味本位で借りることは薦めないと。規約のことも言いました。飛ばさないで読んでくださいと。」

自分を睨んだ男の目が、人間以外の何かのものに感じられた。

恐怖で足ががくがくと震える。

「私は同じ忠告は二度致しません。私を、規約を信用しなかったあなたが悪いのです。……残念ですね。あなたにはこんな風になって頂きたくありませんでした。」

男は素晴らしい残すと、呆然と立ち尽くす少年を残し、店の奥へ入っていった。

自殺屋の本を読みきることはできない。

老人になった自分が、自殺屋の本に埋め尽くされる悪夢を、連日見続けていた。

夜中にうなされ、何度も目が覚める。

仕事に集中できるわけもなく、解雇される始末。

少年は、いや、青年は親にも見離され、途方に暮れていた。

いくら逃げても眠ればあの夢が自分を追い詰める。

こんな苦しみを味わうくらいならば、自殺屋などに出会わないほうがよかった。

ふらふらと街の中を彷徨する。

意識などないに等しかった。

車通りの激しい道の歩道に立ち、行き交う車をぼうっと眺めていた。ふらりと足がその車のほうに向かっていたことに気付くことなく、青年は走ってきたトラックに衝突した。

そして、何が起きたのかを理解する間もなく、命を、絶った。

「なあ、あいつ自殺したんだって？」

「え、本当に!？」

「ふらふら道に飛び出したらしいよ。でもあいつ、もう高校卒業した頃から廃人に近かったらしいじゃん。自殺考えてたんじゃないの?」

「えー。高校の時はそんなこと絶対しなそうな人だったのにね!」

少年の高校の同級生の同窓会では、数分間だけこんな会話がされていた。

C a s e 3 + e n d

C a s e 3 - 7 + 別 (後書き)

第三部終了です。これからよろしくお願いします。

Case 4-1 薬物

自殺とは

死は恐れるものではない。

死は万人に平等に訪れる。

自殺は運命である。

自分が決めるものではない。決められているものである。

人間の運命はこの世に生まれ、泣き声をあげたその瞬間にすでに決まっている。

自殺をする人間の寿命が、自殺をするときである。

自殺は命を縮める行為ではない。

自殺は「逃げ」ではない。

自殺は「敗北」ではない。

自殺は「愚かな行為」ではない。

「哀しき運命」である。

この「哀しき運命」を、神に逆らい、一つ一つ変えてゆこうと、消してゆこうと。

この世に存在する店がある。

自殺屋

風車が、からからと音を立てて回っていた。

蟬の声が体の芯に響く。

日差しが強く照りつけ、道路に蜃気楼が広がっている。

そんな中で、黒い服を着、着物を羽織った男が歩いていた。

あまりにも季節はずれなその姿。

それでも、彼を振り返る人間はいない。

まるでその存在が、そこにないように。

「ああ、暑いですね。」

格好と全く合わない一言を呟き、男は公園の中を見た。

子供達が元気に走り回っている。

微笑ましい光景だが、男はそれを悲しそうに見つめた。

しばらくすると、持っていた包みを抱えなおし、細い路地に向かって歩を進めた。

店の前に、一人の青年が立っていた。

背広を着て、革の鞆を持った、サラリーマン風の男である。

そつと背後に近づくと、咄嗟に振り向き、身構えた。

「ああ、驚かせてすみません。どうかさいましたか。」

男が笑って尋ねると青年は眼鏡を左手で少し上げ、困ったように視線を游がせた。

「あ、あの……自殺屋って……ここの店の人ってどんな人ですか……」

「私が自殺屋の店主ですが。」

青年の質問ににこりと笑んで答えると、彼は驚いたように目を見開き、気持ち後ろにあとずさった。

間合いを取り、帽子に隠された男の顔を覗きこむ。

「も、もっと化け物みたいな人なのかと……思っていました……」

「いたって普通の人間のつもりですが。」

くすくすと笑いながら言うと、青年はほんの少し安心した様子で、笑ってみせた。

猫背のせいか、酷くびくびくした臆病な印象の青年である。

人が良さそう、というのはこういう人間のことを言うのだろうか。

「ところで、なぜここに？」

男が聞くと、青年は急に真剣な顔つきになった。

そういえば、少し顔色が良くない。

「……自殺を……したくて……」

そう言った青年の顔が、見る見る青ざめていく。

そのうちに、がたがたと体が震えだし、力が抜けたようにがくりとその場に座り込んでしまった。

鞆を抱え込んだままうずくまってしまった青年に、男がそっと声をかける。

「大丈夫ですか？ お体の調子がよろしくないようですね。どうぞ店で休んで行ってください。」

青年は男に支えられ、俯いたまま店に入った。

ソファに座り、体を横たえる。

「鞆をお置きになったらどうですか？ 盗ったりしませんよ。」

しっかりと抱きしめたままの鞆に手を伸ばすと、青年は反射的に男の手を振り払い、体を起こした。

「あ……その……」

「安心してください。私は貴方の役に立ちたいのです。」

男が優しく話しかけると、青年はようやく鞆を体から離し、それを開けた。

中から出てきたのは、数本の注射器と小さな瓶に入った液体。

「……ドラッグですか。」

「三年前に一度……知り合いに貰ったのがきっかけなんです……。一度使ったら……やめられなくなって……。」

「ドラッグはそういうものです。人間の心を蝕む。」

「でも……親にも迷惑をかけ、金銭面でももう限界なんです……。」

「それで、死ぬしかない？」

小さく男が言うと、青年はこくりと一度首を縦に振った。

そしてそのまま泣き出してしまおう。

レンズの向こうで、涙腺が壊れてしまったように涙が溢れた。

「……楽に、確実に死ぬる方法をお教えいたします。」

男は青年の頭を掴み、右に傾けると、その首筋にすつと爪を当てた。「ここを、鋭い刃物で深く切ってください。よく切れる刃物ならばさほど力も要らず、簡単に切れます。一気に血液が噴出して、すぐに死ねますよ。手首を切るよりも数倍確実です。」

そう言っ、青年の手首のシャツを捲る。そこには蚯蚓腫れのような傷痕があった。

いわゆるリストカットというものである。青年は驚いた顔をして、手を引き、傷痕を隠した。

その青年をしばらく見つめ、男が口を開く。

「ですが、貴方はまだ死ぬべきではありません。先程貴方は笑ったではありませんか。

笑えるということは、まだ生きる力が残っているということです。諦めるのは早いのですよ。ドラッグなどに負けない心を作ればいいのです。

それには、ドラッグ以外に真つ直ぐ心に向けること。

手をお貸し致しましょう。貴方が生きる為に。」

Case 4-2 苦

青年が自殺屋を訪れ、三日。青年は仕事を辞め、治療に専念することを決めた。

また、自殺屋に通うためでもある。

「いらっしやいませ。」

店を再び訪れた青年に、男は笑顔で挨拶をした。

青年の手には、透明のカードと、二冊の本。

「本を読むの、慣れてなくて……二冊読むのに三日もかかってしまいました。」

「段々と慣れます。期限はございませんし、ゆっくり読んでくださって構いませんよ。」

男は常に優しい口調で話しかける。

そのためか、こんな薄暗く怪しい店でも、青年にとって居心地がよい気がした。

「あの、これから本を読みきるまでは、この店で本を読んでもいいですか。」

青年の問いかけに、男は少し意外そうな顔をした。

「構いませんが、借りて帰ってくださって良いのですよ?」

「いえ……ここはなんだか落ち着くし、家で一人で読んでいたら、自分が何をするかわからないし……それに、あなたと沢山話してみたいんです。」

「私と、ですか?」

「はい。駄目ですか……?」

落ち込んだ様子を見て、男は楽しそうに笑った。

「いいいえ、よろしいですよ。私でよければ、話相手になりましたよ。どうぞここで読んでみてください。」

自殺屋を居心地いいなど言ったのは、今まで何人もの人間が訪れた中で、この青年だけであった。

大抵の人間は最初、自殺屋の雰囲気を恐れ、本を借りる時以外は立ち寄らない。

二度目の来訪だというのに、青年は自殺屋を恐れることなく、居心地いいとさえ感じた。

そして何よりも、この男と色々な話をしてみたいと強く思っていた。それを、男は酷く嬉しく思った。

「こんにちは。暑いですね。」

まるで行きつけの居酒屋にでもよるような口ぶりで、青年が自殺屋を訪れた。

「そうですね、体調など崩してはいませんか。」

男も、同じように何気ない言葉を返す。

青年は相変わらず少しだけ顔が青白い。腕には細い血管が浮き出し、無数の注射痕が残っている。

「……薬をやめてから、あまり体調がよくないんです。それと……夢を見るんです。」

「どのような夢ですか。」

「大勢の人に、追われる夢です。周りにいる人の目が、全て俺を睨んでいる気がする。体が震えて、立てなくなる。座り込んだ俺を、皆が上から見下ろしているんです。お前は駄目な人間だ、と。」

ぽつりぽつりと話す青年を、男は黙って見つめていた。

青年が背中を丸めて自分の体を抱きしめるようにその場に座り込んでしまう。

その体をそっと立たせ、ソファに座らせる。

たった数分の間に、顔色が土気色に変わった。

「苦しいでしょう、辛いでしょう。ですが、貴方はそれを越えなければなりません。それが正しい道へ戻るための、貴方への試練なのです。」

男は小さな声で青年を宥めながら、背中を擦る。

「……………一人の女性の話を致しましょうか。体を横たえてくださっ

でも構いません。辛くない体勢で聞いていてください。」
男は向かいの椅子に戻り、腰を下ろす。
そして、口を開いた。

Case 4-3 鬱病

鬱病という病をご存知ですか。

誰でも、病名くらいは耳にしたことがあると思います。

鬱病とは何らかの原因で気分が落ち込み、生きるエネルギーが乏しくなった結果、身体に不調があらわれる病気です。

現在の日本では5人に1人が、一生のうちで一度は鬱病を経験するといわれています。

鬱病は日々のストレスからくるものが大半なのです。決してなる可能性の低い病ではないのです。

特にまじめな方や完璧主義の方、几帳面であったり、人目を非常に気にする方は鬱病になりやすいといわれています。

そして鬱病は、自殺に繋がりがやすいのです。

「自分の存在理由がわからない」

「なにもする気が起きない」

「周りの人間にとって自分には必要のない存在なのではないだろうか」
そのような考えが、結果的に自殺という行為を引き起こす。

鬱病は不治の病ではありません。当然治療法がございます。

それでも、なかなか鬱病から立ち直れず、苦しんでいる方は大勢いらっしゃいます。

これからお話するのは、そんな病に今も苦しんでいる、一人の女性の話です。

彼女は普通の家庭に、普通の子供として生まれました。

小さな頃から母親に、

「女の子らしく」

育てられた彼女。

しかし彼女の人生は途中で急激に降下を始めるのです。

父親の転勤、そして転校先で受けた、幼い子供達のある意味では純粹な、いじめという行為。

純粹で、重く、暗く汚い。

暴力、罵倒。いじめは彼女の体と心を蝕んでいきました。

そして、いじめにあっていた事が両親の耳に入る。

その時の親からの仕置。助けを求める対象であるはずの親からの、
厳しい言葉。

彼女の心に、深い恐怖が植え付けられました。

そんな彼女に、更に不幸がふりかかります。

中学生になり、彼女には友人ができました。

しかし、平和な日々がまたも崩れてゆく。

彼女は、様々な濡衣を着せられていました。

してもいけないことで、”正しい教師”の皮を被った人間に責められ、
酷い言葉を浴びせられ、彼女は何を信じたらいいのか、わからなくなっ
ていきました。

そうして歪んでしまった心が、今度はいじめという行為をする側に
姿を変える。

彼女は、今まで自分の心に切りつけられた傷を癒すかのように、い
じめを続けました。

しかし、そのようなことでは傷は当然癒えない。

その時は快感を得ても、最終的に残ってしまうのは、深い後悔のみ。
高校に入り、彼女は変わります。

人当たりをよくする。

勉強をし、成績をよくする。

彼女は”優等生”を演じることに徹しました。

しかしそれには、酷く精神的疲労が伴いました。

それが、彼女の罪滅ぼしだったのでしよう。

そして大学生になり、彼女に告げられた病名——鬱病——。
周囲の励ましの言葉が、辛い。

「頑張つて。」

何が？

「大丈夫だよ。」

どうしてわかるの？

「楽しいこと考えようよ。」

楽しいことって？

「あなたには私達がついてるから。」

私の気持ちなんてわからないくせに。

彼女は現在でも、生きることを悩んでいます。葛藤を続けています。

人は誰でも、生きる意味、自分の存在理由はわからないものです。

悩み、苦しみ、それでも生きた先に、本当の存在理由が見付かるのではないでしょう。

苦しまずに生きる方はいません。

悲しまずに生きる方はいません。

そして誰もが人生の中で自分の生きる意味を探すのです。

それは簡単には見付かりません。

しかし、見付からないことを悲観することはないのです。それが、大抵なのです。

けれど、私は思うのです。

存在理由などそれほど重要ではない。

私達は、”生きる”ために”生まれる”。

それだけなのです。

C a s e 4－3＋鬱病（後書き）

今回の話は、実在する方の話です。

鬱病の苦しみを、理解して頂けたらと思います。
あなたの周りには鬱病の方はいないでしょうか。

Case 4-4 休

いつの間にか青年の目から涙が溢れていた。頬を伝って、ソファに落ちる。

「その人は……今でも生きていますか。」

「ええ、苦しみと闘いながら、それでもしっかりと生きています。」
心身共に苦しみながら生きるというのは、どんな気分なのだろうか。自分よりも苦しんでいる人がいる。そう思うと、涙が止まらなかった。

「…自分の苦しみを、他人のものと比べることはありません。苦しみの重さは、人それぞれです。どっちの方が辛いだろうということはありません。ですが、自分だけが苦しんでいるとは決して思わないでください。程度はどうであれその方にとっては重い苦しみを、誰もが持っています。そしてそれを抱えて生きています。」

男は小さな声で話しながら横たわる青年に近寄った。
そして、正面にしゃがむ。

「生きることをやめなさい。疲れたら休んでもいいのです。苦しければ足を止めて下を向いても構いません。そこで無理をしても、もっと苦しいだけです。けれども、また必ず立ち上がってください。前を見てください。苦しみの闇を抜けた時の光の眩しさ、喜びを知ってください。あなたになら、出来ます。私が保証致します。」

言い終わって見せた男の笑顔が、青年には酷く悲しそうに見えた。それでも、その眼差しはなんとも表しようのない、優しさに溢れている。

青年は、小さく頷き、体を起こした。

「気分はどうですか。」

「……大丈夫です。なんだか凄く体が楽になった気がします。今は、俺にとっての休憩になったのかもしれませんが。ここからまた、

前を見ます。」

青年が男に笑ってみせると、男はゆっくりと頷き、立ち上がった。着物を羽織りなおす。

「今までこれ程喋ることがなかったものですから、少々疲れました。私は奥で少し眠ってきます。ここで読んでいきますか。」

男の質問に、青年は一度頷いて答えた。

それを確認して、男が軽く頭を下げ、身を翻す。

「あ、あの、ここって閉店時間何時ですか？」

後ろから投げられた質問に、男は半身だけ振り返って口を開いた。

「閉店時間はございません。この店は、あなたが訪れた時が開店時間であり、あなたがお帰りになる時が閉店時間です。好きなだけ読んでいって構いませんよ。」

言い終わると、再び歩を進め、店の奥の闇へと姿を消した。

客が来た時が開店時間で帰った時が閉店時間。

普通の店ならば逆である。やはり不思議な店だと少し首を傾げながら、青年はふと店の外を見た。

知らぬ間に雨が降っていた。そういえば微かに雨の匂いがする。

音のしない、静かな雨である。

天気予報で雨が降るとは言っていなかった。故に傘など持っていない。

雨が止むまでは何にしてもここで本を読むしかないようだ、青年は本棚に向かった。

手に持った本を棚に戻し、次の一冊を手にとる。

その時、どこからか鈴の音が聞こえた気がした。しかし、周りを見回してもそこには静寂が広がっている。

「気のせいかな……」

青年は呟き、ソファに戻った。黒いハードカバーを捲る。

『自殺のすすめ』

自殺のすすめ 始めに

自殺の方法は様々である。

方法はどれでも構わない。

道具を使おうが、谷底に身を投げようが構わない。

しかし覚えておいてほしい。

自殺が何も生み出さないことを。

自殺をすることで、自分の周りの人間が悲しむことを。

どんなに孤立した人間であってもその死を誰一人悲しまないことは決して無い。

それだけは疑うな。

それでもなお苦しい、死にたいと思うならば誰にもそれを止める権限は無い。

自殺をお勧めしよう。

Case 4-4+休(後書き)

一応ですが、本気で自殺をすることをすすめているわけではありません(汗)

小説の中の本ですので、ご了承ください。

本気にする方はいないと思うのですが、一応。

この文章で嫌悪感を覚えた方がいらっしやいましたら、申し訳ありません。

Case 4-5 選択（前書き）

今回は少しだけ笑いを含んでいます。
たぶん。

毎回のことですが更新スピードが遅くて申し訳ありません汗

Case 4－5＋選択

どのくらいの時間が経っただろうか。

外はすでに暗闇に包まれている。

男が店の奥に姿を消してから、三冊目の本を読み終わった。

おそらく、今は深夜。青年は、そこで初めて腕時計を忘れたことに気づいた。

店内に時計はない。

「どうしよう……帰ろうかな。」

読み終わった本を棚に戻し、ソファに戻る。

すると、どこかで鈴の音がした。

昼間に聞いたものと同じ音。

青年はきよきよと周りを見回した。

しかし、なんの気配もなく、鈴の音がするどころかなんの音もしない。

青年が不思議に思って首を傾げていると、足元に何か温かいものがぶつかった。

心臓が急激に速くなる。

その温かいものの方からチリンと鈴の音が聞こえた。

次いで、高い鳴き声。

「……猫？」

青年の足元にいた温かいそれは、小さな黒猫だった。

漆黒の体、金色の鈴が付いた赤い首輪。漫画か小説にでも出てくるような猫である。

青年はほっと胸を撫で下ろし、その黒猫を抱き上げた。

両手の上に乗ってしまうほど小さな子猫である。

「なんだお前、飼う猫か？」

その問いかけに、猫はにゃあと一声答えた。

それと同時に、店内に明かりが灯った。

青年が反射的に振り返ると、そこに男が立っていた。

昼間と変わらぬ出で立ちである。

男は青年の手の上に猫を見つけると、にこりと微笑んで歩み寄った。

「鈴の音が聞こえると思ったら、やはり来ていたんですね、ポチ。」

「……………ポチ？」

どこに犬がいるのだろうかと青年はしばらく辺りを見回し、それがこの黒猫の名前なのだと気づいた。

猫にポチとは、一体どんなネーミングセンスなのだろうかと少し笑ってしまふ。

「この子、ここで飼っているんですか？」

青年の問いに、男は黒猫を抱きながら一度頷いた。

「飼っているというより、棲みついてしまったのです。もう六年くらいここにいますね。」

六年という年月を、青年は疑問に思った。

少なくとも六年生きている猫が、こんなに小さな体なのだろうか。

青年が猫を見つめていると、男が口を開いた。

「この子は、成長が止まってしまったのです。一生このまま、小さな弱い体のままで生きなければなりません。走ることも満足にできないのです。」

成長が止まってしまう病気。”成長ホルモン分泌不全低身長症”と言ったのだろうか。

もつともそれは人間の病気としての呼び方で、猫の場合の病名は知らない。

青年がどこかで聞いた情報を思い返していると、男がカウンターに座り、猫の頭を撫でながら話し始めた。

「回虫という寄生虫がいます。それが体の中に寄生し、成長障害を引き起こすのです。この病気は、胎盤感染がほとんどです。生まれたときから、自由に走り回れないという辛い一生を背負って生きている。辛いことでしょうね。……ですが、犬や猫、動物達は自殺はしません。どんなに辛くとも、最後まで生きて、寿命を迎えます。」

なぜだと思えますか。」

青年は、首を振って答える。

「知らないからです。人間と違って、動物達は自殺という方法を知りません。本能で生きていますから。人間は他の生き物よりも遥かに多く複雑な感情を持ち、頭脳を持っている。だからこそ、自殺というものを知っているのです。そして、選ぶこともできます。生きるか、死ぬか。動物達は生きることしか知りません。それはいいことなんでしょうか、悪いことなんでしょうか。」

青年は、男に撫でられて喉を鳴らす猫をじっと見つめた。

『生きることしか知らない』

なんだか少し、悲しくなった。

この猫のように、死ぬ方法を知らず、苦痛に耐えながら生きることがはたしていいのか悪いのか答えは出なかった。

「選択することができる我々には、わかりませんね。選べない、ということがどんなことなのか。ですが、選択できるからこそよく考えて選びましょう。結果を急ぐことはありませんから。」

男の言葉に、青年はゆっくりと頷いて答えた。

「さて、本は読めましたか。」

「はい、三冊。今日はもう帰ります。また明日来ますね。」

「わかりました。暗いですからお気をつけてお帰りください。」

男が立ち上がり、ぺこりと頭を下げると、青年の意識がそこでぷつりと途切れた。

C a s e 4－6＋別（前書き）

前回の更新から一ヶ月も経ってしまいました。
待っていてくださった方には本当に申し訳ありません。

Case 4-6 別

冬が近づき、外の空気が冷たくなってきた。

自殺屋に出会って、もうじき三度目の冬。青年の薬物中毒は、すでに回復していた。

自殺ということに対しても、思考は向かなくなっていた。

「こんにちは。」

白く上る息で挨拶をし、店に入ると、外よりは幾分暖かった。

しかし、いつもある姿がカウンターにない。

ソファに黒猫ポチが横たわっていた。

体が微かに動いている。眠っているのだろう。

そつと近づき、横に腰を下ろして撫でると、少し顔を見てにゃあと鳴いた。

どこか寂しそうである。

「ご主人はどこに行ったんだ？」

猫の顔を覗きこみながら話しかけると、ふいと顔を反らしてまた眠ってしまった。

青年はしばらく店の外と奥を見回していたが、ソファから立ち上がり、本棚へと歩み寄った。

暗闇に続く本棚の前を歩いていく。

歩きながら、相当な数の本を読んできたのだと実感した。

「このあたりだったかな…」

つぶやいて本棚の前で止まったとき、暗闇の向こうから男が現れた。突然のことに、どきりと心臓が反応する。

男は微笑んでいた。

その手には、一冊の本。

「あ：勝手に入ってすみません……。」「

「いえ、構いませんよ。：お待ちしておりました。」

「え？」

青年が首を傾げると、男はそつと歩み寄り、手に持っていた本を差し出した。

青年は、わからない、という顔で男を見つめる。

「これが、最後の本です。」

「……最後？」

「よくここまで読んでくださいました。もう、あなたの体の中には苦しみは潜んでいません。自殺の必要はないでしょう。」

男が柔らかい表情で話を続ける。

「今まで本当にありがとうございました。」

「ま……待ってください！……これで、最後なんですか？」

「はい。……意外と少なかったですか？期間としてはさほど長くなかったと思います。ですが、あなたが考えを変えるには、十分な期間だったのではないのでしょうか。」

青年は黙った。いつから自殺を考えなくなったのか、はつきりとわからない。

もしかしたらもう随分前からそんな気持ちはなかったのではないだろうか。

「あ……あの……この店を返したら、もう……ここには来てはいけませんか？」

「来てはいけない、と言いますか、来られません。あなたにはもうこの店は必要ありません。自殺を考えない方にとっては、この店は良くないのです。」

「もう……話をするのも無理ですか。」

「はい。」

男が頷くと、青年は俯き黙ってしまった。

こんなにもあっさりと終わってしまうとは思わなかった。

三年という年月とは、こんなに早く過ぎるものだっただろうか。

幾度と無く店を訪れ男と話をしたが、男は一度たりとも自身のことに触れはしなかった。

なんの理由もなくこんな店を経営するはずがないだろう。

青年は、ずっとそれを疑問に思っていた。

これで話するのが最後ならば、もしかしたら話してくれるのではないかと、青年は思い切って口を開いた。

「あの……じゃあ最後に教えてください。」

「はい、なんでしょうか。」

「……貴方は、どうしてこの店を……自殺屋を始めようと思ったんですか。」

青年の問いに、男は俯いた。

しばらく沈黙が続き、二人は向き合ったまま微動だにしなかった。先に口を開いたのは、青年。

「あ、その、いいんです。話したくないことだとは思うんです。だから……すみません、変なこと聞いて……。」

「……いいえ、よろしいですよ。……面白くありませんよ。それでもよろしければ。」

言って、男は本を持ったままカウンターに向かった。

C a s e 4－6＋別（後書き）

ここから最終章に入ります。

最後までお付き合い頂けたら幸いです。

L a s t C a s e — 1 + 男（前書き）

最終章の始まりです。
ずっと昔の古い話。

Last Case—1十男

随分と昔の話です。

一人の男が公園のベンチに座っていた。

男が見つめる先には、小さな赤ん坊とその赤ん坊を抱える女の姿。

女は男に気付き、にこりと笑って手を振った。

男も同じようにして返す。

二人は夫婦であった。

誰が見ても羨むような、仲の良い美男美女の夫婦。

二人は、一つの小さな幸せを手に入れ、日々満たされながら生きていた。

それが崩れ落ちたのは赤ん坊が生まれて二年後のこと。

二人の幸せな日々は、些細な、そしてありがちな争いで脆く儚く散ってしまった。

まだ小さかった子供にとって、母親というのは、切り離せない存在であった。

男は、泣く泣く愛しいわが子との関係を断ち切るしかなかった。

何年経っても子供に会うことは許されず、男は一人で生きていた。

瞼の裏の子供は、可愛らしい赤ん坊のまま。

今どこで何をしているのか、男には想像もつかない。

元妻の家にプレゼントを送っても、全て宛先不明で男へと返ってきてしまった。

出来ることならば手放したくなかった幸せ。

なぜ妻の過ちをあんなにも叱咤してしまったのか。それが自分の過ちだったのではないかと、男は自分を責めた。

誰にも話すことも出来ず、男は苦しみ続けた。

それから二年。

男はただ生きていた。

何の目的もなく、明日生きることだけを考えながら。

彼の仕事はトラックの運転手。転々と職業を変えた結果、そこに落ち着いたのだった。

冬、夕暮れ時の交差点を曲がろうとハンドルを切った。

刹那、どん、と鈍い音がした。

次いで、聞いたことも無いぐしゃりという音。

やってしまった。

何をぶつけたのか、轢いてしまったのか、見なくても男にはわかった。

人を、轢いてしまった。

背筋をぞくぞくと寒気が駆け抜けて、一気に男の体が震えだした。はっと我に返り、急いでトラックから飛び降りる。

タイヤの下に無残に潰されていたのは、少女。

白い肌に、赤黒い大量の鮮血がよく映えた。

セーラー服は、ほとんど元の色をなくしていた。

見開いた目が、自分をじっと見ている気がした。

L a s t C a s e ー 1 十 男 (後書き)

次の更新も出来るだけ早めに行いたいと思っています。
どうぞ最後までお付き合いください。

Last Case—2十絶望

男が霊安室で眠る少女を呆然と見つめていると、部屋の扉が突然勢いよく開いた。

入ってきたのは、少女の母親。

相当急いできたらしく、息が荒い。娘が交通事故で命を落としたと聞けば、当然だろうが。

男は母親の顔を見ずに立ち上がり、深く頭を下げた。

「申し訳ありません。俺の過失です。」

その男の横をすり抜け、母親は少女に駆け寄った。

床に膝をつき、横たわった体を抱きかかえる。

しばらくそのまま泣いていた母親が、立ち上がって男に掴みかかった。

男は俯いたまま女の顔を見ようとしなない。

「どうしてっ……どうしてこんな歳で死ななければならないの！返してっ……娘を返してよ！！」

激しく自分を責めるその声が、あの時の妻の声にかぶって、男は顔を上げた。

そして、絶句。

そこにあったのは、確かに歳はとったが、変わらず整った妻の顔。女も男に気付き、目を見開いた。

「あなた……」

そして男は、女の向こうで静かに眠る少女を見た。顔に触れ、思う。

——嗚呼、そういうえばよく似ている。——

どこかで幸せに暮らしていたはずの愛しい娘を、自分が殺してしまった。

どうかいつまでも続くようにと願った娘の幸せを、自分が奪った。絶望と恐怖が一気に男を襲った。

がたがたと体が震えだし、男はその場に座り込む。

あんなにも会いたいと願った娘が、変わり果てた姿で目の前にいる。

「あ……あああああああ……！！！」

暗い部屋の中に、男の叫び声が響いた。

Last Case—3十悔

事故から3週間後、女は自ら命を絶った。

大事に娘の遺影を抱えたまま。

刑務所の中で知らせを聞いた男は、酷く嘆いた。

自分はなんということをしてしまったのだろうと、この世にはもういない娘と妻に謝り続けた。

そして、一ヶ月後。男も娘と妻の跡を追った。

生きて背負う苦しみよりも、死ぬときの苦しみの方が男にとってずっと軽いものだった。

「……私は、娘を殺し妻を殺し、それでも自分を殺したことを一番悔やんでいます。あの時何故生き続けようとしなかったのか」

「……何故ですか」

「……私は……死ねばすぐに地獄に堕ちられるものと思っていました。しかし、すぐ逝くことが出来ず、両親が私の葬式で泣いているのを見てしまったのです」

それを聞き、青年が何も言えずに黙っていると、男は哀しそうな笑みを見せた。

「娘と妻を殺し、悲しみを生み出してしまったことへの罪滅ぼしに、命を絶ったつもりでした。ですが、私は更に悲しみを生み出しただけなのです。何故生きて罪を償おうとしなかったのか。結局自分が一番だったのです。苦しみたくなかったのです。……愚かですね、私は」

雨の薫りが店の中に吹き込んだ。

静かな時間が流れていく。

男がずっと立ち上がり、店の扉に向かった。

青年に背を向けたまま、言葉を続ける。

「この店は、罪滅ぼしです。娘と妻への、そして両親への謝罪です。

簡単に死ぬことを選んでしまったことへの、懺悔の形なのです」

「……懺悔……」

「自殺は、罪ではありません。逃げたと一概には言えません。ですが、大変勿体のないことです。悲しみを生み出す行為です。……どんな人間でも、この世で本当にたった独りで生きている方はいません。自殺をすれば、必ず悲しむ人がいます」

男が青年を振り返る。

「生きてください。辛いかもしれませんが、苦しいかもしれません。ですが、決してそれだけではありません。出来る限り死を選ばないでください。……後悔を、なさらないでください」

青年の目に涙が溢れた。

男の言葉に、心が締め付けられるように痛んだ。

「……もうこんな時間ですね。雨も止んだことです。今のうちにお帰りになったほうがよろしいですよ」

ぱちんと懐中時計の蓋を閉めながら、男が沈黙を破った。

辺りは昼間よりも更に静まり返り、雨の残り香が鼻を掠める。

青年の足元で黒猫が小さく鳴いた。

「……返却をしていただくと同時にこの店の記憶は全て無くなります。ですが、あなたはもう大丈夫です」

男が微笑むのに、青年も同じように笑みで返す。

ポケットからカードを取り出すと、男が一冊の本を青年に差し出した。

「長い間、本当にありがとうございました。あなたのような方に出会えて良かった。あなたが、自殺をなさる前にここを訪れてくださって本当に嬉しい限りです。これからのあなたの人生に、多くの幸があるよう祈っています」

そして、青年の意識が段々と薄れ、視界が暗闇に包まれていった。

Last Case—4—自殺屋

「ただいま」

「おかえり。遅かったわね。どこに行っていたの？」

「……わからない」

「え？」

「でも、なんだか凄く胸のつかえが取れた気分なんだ。……母さん。俺、ちゃんと生きるから。母さんと親父に辛い思いはさせないから」

どうか生きて下さい。

私のような後悔をして頂きたくありません。苦しみに負けそうになったなら立ち止まってください。少しでも休んでください。

休むことは罪にはなりません。

それを咎めることは誰にも出来ません。

ですが、そこで終わらせないでください。必ずまた立ち上がって前を向いてください。

人間は誰でも皆弱いものです。それでも、生きることには出来る筈なのです。生まれてきたということは、生きる権利を持っているのです。

どんなに苦しくとも、それを越えた先には必ず何かがあります。生きることが辞めないでください。決して諦めないでください。

もしも貴方が地に伏してしまっただけならば、一人で立ち上がれなかったなら、私が立ち上がるお手伝いを致しましょう。

生きることが辛くなったのなら、自殺をなさる前に少しかこの店を思い出してみてください。

私は貴方の力になりました。

ああ、いらっしやいませ。

此処は自殺屋です。

私ですか？

私は、自殺屋の店主です。

自殺をするのですか？

L a s t C a s e + e n d

L a s t C a s e ー 4 十 自 殺 屋 (後 書 き)

今までご愛読ありがとうございました。

これからも小説を書いていきたいと思しますので、こんな作者です
がよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4156a/>

自殺屋

2010年10月10日13時36分発行